

經濟學

方法論

楠井隆三 **理論經濟學體系論**——經濟學認識論の一端——(臺北帝國大學文政學部政學科研究年報一號、三四五—四四四頁) 目次。第一章序論—體系論の本質、第二章經濟學認識に於ける體系論、第一節閉却されたる體系論、第二節從來の体系の批判、第三章積極說、第一節方法の概說、第二節正しき体系、第四章結論。

田邊忠男 **經濟學方法論の爲に**——經濟學對象の規定——(經濟學論集、四卷一二號、昭九・一二一—一四八頁) 目次。一、經濟學の對象、二、經濟學の認識論的、論理的性質、(イ)經濟學と實踐との關係、(ロ)經濟學の全科學の中に於て占むる位置、(ハ)經濟學の對象の把握方法。——なほ、續篇が同誌今年一月號に載つてゐることを附記しておく。

桑原 晋 **理論經濟學に於ける數學的方法**(薺根高商論叢、一五號、昭九・六、一—一二三頁)
波多野堯 **歷史學的概念構成の原理**(橫濱市立横濱商業專門學校研究論集、七卷、昭九・二、二

七一—四七頁)

米田庄太郎 **マルクスの認識論原理**(フオイエルバツハに關するテーゼンに於ける)(經濟學叢三八卷一號、四一—六二頁)

板垣與一 **政策的認識の問題**(經濟學研究三號、昭九・七、二二七—二八五頁)

基礎概念・基礎體系

福井孝治 **經濟的空間**(大阪商科大学經濟研究年報、五號、昭九・六、五七—九八頁) ゴツトルの思索にそつた經濟生活の根本的考察。

丸谷喜市 **「技術」と「經濟」**(國民經濟雜誌、五六卷二號、昭九・二、一一—二〇頁)

碓水厚次 **機械と經濟**(研究資料彙報、九卷二號、昭九・五、一一—二二頁)

高田保馬 **生産力の問題**(經濟論叢、三九卷一號、昭九・七、一九—三九頁) 生産力と生産關係とが如何なる聯絡に立つつかといふ唯物史觀の中心の問題について、大戰後あらはれた三種の見解を紹介批評する。第一は生産力と生産關係との聯絡を機械的受動的なものと見る立場(フハアリン)、第二は兩者いづれも發展の內在的論理をもつとするも、むしろ生産關係の發展にたいして生産

力の發展が從屬すると見る立場(ルウビン・カアレフのメンシエヴィキ化した觀念論的解釋) 第三はロシアの國情にもとづく實踐的必要から成立したレーニンの立場、いはゆる正統派の立場。この立場では兩者は形式内容の關係において相滲透し相爭鬭するものと見る。だが、辯證法的の發展は生産様式の全体の運動の姿であり、發展の内部構造は、部分の因果的考察によつて明かにされるほかないことはマルクス自身の認めるところだ。正統派的解釋の結論は生産關係が生産力を決定するといふことに歸着する。しかるに生産關係そのものは利潤獲得の競争を通して技術の變化と關係なく自ら變動する。資本蓄積に伴ふ階級關係の變化も進行する。生産力にあらざるに生産關係の動きが歴史の動きを決定するといふことになり、「社會關係」の動きが歴史の動きを決定するといふことになり、すなはち「社會中心史觀」と根本的に相通することになる。「唯物史觀」が私共の抱いてゐる歴史觀に接近したわけである。」

河野吉男 **第三史觀への一考察**——高田博士の教示を乞ひて——(商業と經濟、一五卷一號、昭九・

九、二〇一—二二三頁)

南亮三郎 歴史發展の動力としての人口

(商學討究、八卷下、昭九・二、四〇—七三頁)

作田莊一 世界科學に就て (經濟論叢、三八

卷一號、昭九・二、二七六—二九四頁)

大野信三 全体主義の經濟學 (商學論叢、一

〇號、昭九、九一—一六九頁) 目次。一、フア

ツシズムの勃興と全体主義の復興、二、全

體主義の社會學、三、全體主義と個體主義、

四、全體主義の論理、五、全體の概念、

六、全體主義經濟學の研究方法、七、全體

主義の經濟理論、八、シュパンの資本主義

並びにマルキシズム批判、九、分限階級國

家論、一〇、全部主義學派の主要な代表者、

一一、結論。

西輝男 マルクス經濟學の世界經濟概念

(關西學院大學商學論究、一號、昭九・二、二六一

—二八二頁)

大豊辰雄 資本概念の再吟味 (關東學院商學、

一號、昭九・三、五一—六二頁)

川島良一 稀少の原則と原價の概念 (同志

社商學論叢、九號、昭九・二、四八—六八頁)

北川宗藏 ロレンツ氏の費用概念につい

て (内外研究、七卷三號、昭九・五、二四—三六頁)

鈴木恒雄 杉村廣藏氏著「經濟性的の問題」

(東京商科大学研究年報經濟學研究、第二卷) (主計

會報告、一〇六號、昭八・二、六三—七〇頁)

大熊信行 杉村廣藏「貨幣中心論」に對す

る修正の試み (研究論叢、七卷一號、昭九・七、

一五三—一五四頁)

大熊信行 經濟學と映畫藝術學 — 經濟學に

おける一般技術學の胎動 — (中央公論、四九卷二號、

昭九・二、五六—六五頁) 第一、映畫理論の性格、

第二、映畫的手法の誤用について、第三、

藝術的技術原理の普遍性、第四、經濟學に

おける一般技術學の胎動。 — 經濟學者は

一般技術の考察をその科學の領域内で徐々

におしすすめてきたが、近代諸科學の分化

にもとづく方法的ベダントリーに囚はれ

がちで、一般技術學の体系を經濟學の外域

に産みおとさうなどといふ勇氣を欠いてゐ

る。

大熊信行 理論經濟學者の廣告論 (昭九・

高岡高商商業美術研究」第一輯)

大熊信行 中山伊知郎 「經濟理論と經濟

社會學」 (研究論叢、七卷一號、昭九・七、一五二

—一五三頁)

大熊信行 宮田喜代藏 「生活經濟價值序

論」 (同上、一五〇—一五一頁)

大熊信行 高木友三郎 「生の經濟哲學」

(同上、一三三—一三五頁)

岡田重次 小島昌太郎教授監修 邦譯ゾムバ

ルト原著 「三つの經濟學」 (國民經濟雜誌、

五六卷二號、一四一—一四六頁)

赤羽豐治郎 ゾムバルトの「三つの經濟

學」 — その理解的經濟學の提唱に就て — (竜門經濟

七號、昭八・二、三一—一七頁)

* 高木友三郎 厚生經濟論 (新經濟全集、四、

昭九・四、日本評論社、新四六判序文二頁、本文二八

七頁) 〇〇〇 「厚生」とは、著者において何

を意味するか? 「人生は現實から理想への

行進運動であるが、之を換言すると生から

より善き生への實現運動である。即ち厚生

の實現運動である。」つまり「厚生」とは

「理想」の同義らしい。「理想實現」ともい

ひ、「厚生實現」ともいふ。幸福といへば主

觀的で、厚生といへば客觀的であるとい

ふ。その客觀的基準は文化の各方面におい

て「價値」とよばれる。それが「文化價値」

だ。「經濟では、現實と理想との差額が計

算しうるのみならず、その計算が次第に精

確化する所に經濟價値の特異と發展とがあ

る。」著者の經濟價値の概念といふはさう

いふもので、解釋は容易でない。前著「生

の經濟哲學」(昭・八)に述べられた思想の

要略と見るべく、著者は斷つてゐないが、前著の一部をそのまま利用したところも多く、そこは目次の細目もおなじである。目次（細目を省略す）第一篇「經濟の基礎論」、第一章人生の目的、第二章經濟の目的、第三章人生と經濟行爲、第四章經濟の意義、第五章價值とは何ぞや、第六章經濟行爲の發生、第七章經濟現象の發達、第八章經濟活動の發達條件、第二篇「生産論」、第一章生産の意義、第二章企業、第三章生産資料、第四章労働、第五章資本、第三篇「交換論」、第一章交換の意義、第二章價格、第三章金融、第四章商業、第五章物價、第四篇「分配論」、第一章總説、第二章地代、第三章利子、第四章賃銀、第五章利潤、第五篇「調節論」、第一章合同並に組合、第二章社會政策、第三章恐慌、第四章均衡化運動、第五章資本主義の合理化と均衡化の止揚としての統制ブロック經濟。

*末高信 **經濟科學大綱**（昭九・四、明善社、菊判二八頁）はしがきには、經濟學の「群籍の中で未だ讀み残したものが少なくない、且現代經濟生活の理解についても未だ安じて人に語り得るの境地に達したり

とも考へない。しかし、從來多少讀みもし、考へもしたもののうち、書き留めて置いて、自分の將來の勉學や思索の基礎としたいものがない譯でもない。そんなものを纏めて見たのが本書である。かいて見ると、別段特別に新奇なる体系なり、學說なりを打ち出した所はない。それはこの書は一面學生の參考書としてかゝれたもので、自己の學問を端的に主張するためでないからである」と。そして「眞に自分の經濟學といへる本をいつ書けるか、それは今から約束は出來ないが、機が熟したら、必ず書きたいと思つて居る」といふ希望をも述べてゐる。目次（細目を略す）。第一章經濟科學の意義、第二章現代經濟の成立、其基礎内容及其批評、第三章經濟生活の自然的條件、第四章流通經濟（價值、價格及貨幣、信用）第五章生産及營利經濟の組織、第六章分配及生産要素の價格。はしがきにいふごとく、「學生の參考書」または教科書風のもの。卷末に内外の參考書目をならべてゐるのは、いゝが、とうに廢刊になつた雑誌があつてあつたりしてゐるのはおもしろくない。また、この國の學者の業績の重なるも

のとてあげられたものは、個人別に見ても選擇が穩當をかねてゐるやうである。

*土方成美 **國民經濟讀本**（昭九・五、日本評論社、菊判はしがき目次七頁、本文二二頁）社會の「轉換期に於ては、現在の經濟機構そのものの分析よりも、國民、國家、經濟と云ふやうな關係が寧ろ重要な問題である。本書はかかる見地によつて、今の時代に必要な國民的常識の普及を目的として書いたものである。」（はしがき）目次（一部の細目を略す）。第一章世界經濟の現狀と「非常時」の意義、一、「非常時」は解消せりや、二、世界經濟の構造變化、三、國際分業關係回復の困難、四、「非常時」の經濟的意義、二、政治形式より見たる經濟と國家との關係、第三章歐洲大戰以前の世界的觀並に經濟思想、一、戰前の經濟思想の根柢とその矛盾、自然法的世界觀と功利主義哲學——自由放任學說——私有財産權の根據——正統學派の價值論——アダム・スミスの價值論——リカードの價值論——自由放任學說の矛盾——樂觀論と悲觀論——正統學派の分裂——自然的調和論——社會政策學派——生産の法則と分配の法則——社會政策學派に對する批判——事實より見たる社會政策學派の發展——社會政策の基調の變化——ロマンチズムの極端——歴史學派——二、戰前の思想

の社會的經濟的影響、第四章經濟生活と精神、一、精神と經濟との關係、二、資本主義經濟の發展と資本主義的精神、三、日本精神と日本經濟の特色、第五章經濟と技術、一、技術の意義、二、技術發達の影響、第六章現代經濟組織の特徵、一、現代經濟組織の形式的特徵、二、現代經濟組織の實質的特徵、第七章現代經濟組織の機構、需要供給の法則―價值法則―需要供給法則の限界―需要供給の法則―費用の法則―自由競争説の自己矛盾―靜態動態と需要供給法則の作用―需要供給法則の範圍外にある財政、第八章現代經濟組織に於ける金融の役割、一、金本位制度の作用、二、金融資本、第九章現代經濟生活の發展と景氣の變動、一、現代經濟生活の發展、二、景氣變動の意義・原因・過程、三、景氣變動と構造變化並に精神的基礎の變化、第十章統制經濟運動、一、資本主義經濟の行詰り、二、統制經濟運動の意義、三、アウタルキ―と國際主義、第十一章日本精神と組織經濟、一、我が國民經濟革新の方向、二、日本精神、包容性―求心性―還心性と求心性との交替―綜合的直觀的特性―藝術的特性、三、政治經濟機構、皇室中心政治による強力なる統制と制度の必要、その他。―現在における著者の思想的全

貌をうかゞはしめるもので、その意味では、この國の經濟學者の著作としては類例に乏しいといへる。いはゆる讀本シリーズの一冊。このシリーズの經濟方面のものでは、すでに山崎覺次郎「貨幣讀本」、渡邊萬次郎「金銀讀本」、下村宏「財政讀本」、太田正孝「經濟讀本」などのあることは讀者の知られるとほりである。

* 高田保馬 **マルクス經濟學論評**（昭九、六、改造社、菊判序文二頁、本文三九一頁）

著者のマルクス經濟學にたいする全体としての態度は、積極的および消極的の兩方面にわかれたる。マルクスの業績から著者が自家の体系に攝取した重なるものは、「資本の構成、形態、回轉、及び資本主義經濟の組織に關する分析、資本蓄積の機構に關する洞察、景氣理論に關する若干の見解等」であるといはれてゐる。讀者は「經濟學新講」第一巻および第五巻にそれを見いだすことができるであらう。つぎに、マルクス經濟學にたいする批評では、まづ主として労働價值説のみをとりあつたものとして、「労働價值説の吟味」（一九三一年）があることは讀者の知られるとほり。唯物史觀に

たいする批判では、「階級及第三史觀」その他あり。さて、この書はつぎの目次に示すやうな内容から成りたつ。第一篇は、さきの「労働價值説の吟味」の内容の略説だといはれてゐる。目次。第一、篇總説、第一論マルクス經濟學理論の吟味（昭五・一一、京都帝大特別講演にもつくもの）、一、序論、二、マルクス經濟學の概要、三、外からの批判、四、内からの批判、第二論マルクス經濟學批判の前提、第二篇資本主義沒落理論の批判、第三論資本主義沒落理論の批判、一、全体の見通し、二、人口過剩論と商品過剩論、三、この過剩論の批評、四、政治的作用による修正、五、世界不況と民族主義、第四論人口に關する小論、一、私の人口法則の概観、二、分配係數について、三、批評の批評、第三篇地代論爭、第五論労働價值説の擁護難（中央公論昭五・一二）、一、はしがき、二、「マルクス批判者の批判」の批判、三、内在的批判の要點、四、平均利潤に關して、五、差額地代に關して、六、複維労働の還元に關して、七、價值賦與に關して、第六論マルクスの地代論と價值論（改造昭六・四）一、櫛田

氏のプラス・マイナス説、二、價值以上の價格としての地代、三、何れが内在的か、四、河上氏の矛盾、第七論マルクス地代論をめぐりて、(改造昭六ノ六)一、問題の要點、二、地代に對應する餘剩價值なし——樺田氏への反批判——三、農産物價格は價值より大ならず——向坂氏への反批判の一——四、地代は餘剩價值の一部に非ず——向坂氏への反批判の二——第八論マルクス理論を破壊する者(改造昭六ノ七)一、農業資本の高位構成の假定の誤り、二、農業資本の高位構成は論證せられず、三、樺田氏の反批判の吟味、第九論マルクス地代論の解釋(經濟論叢三三ノ四)一、問題の所在と種々なる試み、二、農産物價格の特殊性、三、E表の説明、地代は餘剩價值である、四、プラス・マイナス説の基礎づけ、五、E表の説明とプラス・マイナス説の矛盾、第十論地代論争の決算(改造昭六ノ一二)一、マルクス學者マルクスを解せず、二、價值法則も理解されてゐない、三、樺田氏亦マルクス學説を解せず、四、新しい論點、第四篇蓄積理論考察、第十一論蓄積理論の一考察、一、蓄積進行の基礎

條件、二、二の不比例、三、マルクス表式の意味する歸結、四、技術からの要求の顧慮、五、ツガン批評の無力、第十二論蓄積理論の書き改め(福田博士追憶記念論集)一、二の書き改め、二、蓄積進行のマルクスの條件、三、蓄積の限界、四、固定資本と蓄積進行の速さ、第十三論蓄積理論の修正(經濟論叢三六ノ二)——説いて久留間氏の批評に及ぶ——一、本論の意圖、二、マルクスに於ける蓄積の條件、三、技術の影響——ツガン批評の困難、四、消費財のあとからの生産、五、ツガンの見解の批評、六、ツガンの亞流、第十四論蓄積過剰の必然性(改造八・七)一、私見への批評、二、新調和論者、三、マルクスの認めたる蓄積條件とツガンのそれ、四、蓄積率の影響を無視するのではない、五、第一部門生産の分解によつて私見を明にす——諸氏への答辯、第十五論マルクスに於ける平均利潤率(經濟論叢三六ノ四)一、利潤率平均と價格計算、二、平均利潤と再生産の不可能、三、ポルトキイウチの價格計算、四、若干の批評——第三篇の地代論争が最も多くの頁をしめてゐることを注意したい。末尾

に掲載誌名が明示されてゐる論文については、一々、論題の下にカッコをしてそれをいれておいた。明示されてゐないものは探索しなかつた。大体、昭和五年以後すなはち五箇年にわたる勞作の集積である。なほ地代論争のいきさつについては、つぎのやうに述べられてゐる。「私が昭和五年夏公にしたる論文『勞働價值説は支持し得らるるや』(改造同年八月號)に對して、樺田氏は其批評『マルクス勞働價值説の擁護』(中央公論同年十月號)を發表せられた。これに對する私の反批判が……『勞働價值説の擁護難』である。ところがその後樺田氏が此論文の地代に關する部分だけをとりあげて再批判を試みられてから、地代論争の展開となり、河上肇、向坂逸郎、其他數氏も参加せられ、甲論乙駁、約一年に亘つた。私の次にかゝぐる(第三篇の)諸論文は、時の順序から云ふと樺田、向坂、河上諸氏に對す反批判となつてゐる。此論争の詳細については、向坂氏『地代論研究』(昭八・二、改造社、前年度本解題を見よ)を参照せらるることを望む」(一四一頁)この論關的著作の一四〇頁に短歌七首をつらねかゝ

けたるは、いにしへのえびらの梅を想ふべきか？ 學術的著作の扉、序文その他に、私生活上の感懷を率直にもらし、あるひは自作の詩歌を挿入するなどのめづらしなものは、わが學界獨特のものであり、國民的な事象の一つと見るべきか？

* 田中力譯 **ランダウー計畫經濟と流通經濟** (社會文庫、第二十冊、昭九・七、日本評論社、四六判、序三頁、本文三六六頁、11.00) 甲 自由流通經濟の功績と缺陷、第一章自由主義理論と拘束經濟、第二章拘束經濟及自由經濟における經濟目的、第三章理想型流通經濟の生産力、第四章流通經濟の反生産的現象、

第一節獨占、一、獨占の價值計算と獨占への傾向、二、生産費の低下によつて獨占は阻止されるか、三、獨占の弊害、四、排他的獨占體が開放的獨占體か、五、經濟決定の即物性と獨占、第二節失業、一、失業による國民經濟の損失、二、景氣と恐慌の發生、三、景氣變動に對する經濟の感受性の増大、四、景氣變動と信用政策、第三節流通經濟の機能における其他二三の缺陷、第四節流通經濟の心理的缺陷——鬭争による協同？、第五節資本主義流通經濟における

貨銀政策、一、獨占體としての勞働組合、

二、固定生産費——勞働者勢力、三、資本形成への脅威、乙 流通經濟内部に於ける計畫經濟的機關、第一章資本主義を共同經濟的に統制することは可能か、第二章獨占統制、第三章國家による貨銀統制、第四章計畫經濟的機關としての發券銀行、丙 社會主義經濟秩序の基調、第一章理想社會への勇氣、第二章國家社會主義と組合社會主義——利潤參加の國家企業、第三章社會主義經濟の價格計算、第四章社會主義における景氣の調整、第五章社會主義社會序説、第一節社會主義と個人の自由、第二節社會主義における政黨？ 職業階級組織？、第三節社會主義における民主政治と經濟、第六章歐洲工業經濟にとつての危険？、丁 社會主義への道、第一章出發問題、第一節力と認識、第二節「資本主義の安定」、第三節階級鬭争、第二章經濟政策的技術、第一節社會化の二方法、第二節現在における公經濟、第三節國有化の任務、戊 社會主義的勞働運動の目標と現在における社會主義的諸可能性、己 結び。

勢力説

五〇

高田保馬 **社會的勢力の分析** (經濟論叢、三九卷六號、昭九・二、二〇一四頁)

高田保馬 **經濟理論に於ける勢力の地位** (經濟論叢、三九卷五號、昭九・二、二二四二頁)

木村健康 **勞銀に於ける社會的なるもの** (「勢力と經濟法則」について) (經濟學論集、四卷一號、昭九・一、九三一—四六頁)

價值問題

高垣貢次郎 **經濟價值理論の一節** (經濟學研究、三號、昭九・七、一—二六頁) 一、經濟理論に於ける價值論と價格論との地位、二、經濟理論に於ける價值論の紛糾、三、經濟價值の心理的性質。——筆者の守つてゐる「心理主義の立場」を明かにするために書かれ、諸學說の批判を第一義とせず。經濟價值現象は一般價值現象の一部分であるとの見解にもとづき、「總ての價值は客觀的實在それ自体ではなく、或る標準に關らしめての被判斷對象と意識的主体との關係の中に成立するものであり、主体によりて意識せられ判斷せらるべきものを以て、

主觀的、心理的性質を有するもの」とある。すなはち、心理主義の立場とはいへ、哲學上の文化價值体系のなかに「經濟價值」の一系列を包攝しようとする態度のごとく、その意味では、左右田博士の思想にも近縁の感ぜられるものがある。「經濟價值」「交換價值」および「價格」の諸關係が、それぞれ、この立場から説明される日が期待される。

小泉信三 價值、價格、勞働（改造、一六卷七號、昭九・七、二一―二七頁）論者の學問的歷程のうへに重大な道標をおいたものとも見られる。經濟理論家としての論者の過去二十年にわたる主たる課題が價值論であつたことは、この學問の國內的事情に通じてあるひとびとが、いづれも承知してゐることがである。各時期におけるその足どりの一進一退や、時には一つの横すべりとみえた價值論否定の一齣すら憶ひだされる。近代における二つの價值說すなはち勞働價值說と限界效用說との對立問題は、つとに論者のとりあつかひつゝあつたものだが、いま一つの到達點がこゝに見られる。もちろん論者の調和的見解は、これまで屢々われ

われの聽いたところである。が、こゝでは二つの思想を一如の体系に化成したものが、具体的に提示されてゐるのである。なほ、しかし、この種の企てが、今にして近代の價值論史のうへに加へるところが幾何であるかといふ問題になると疑問であるけれども、過去の紛争を見返さうとするひとびとのためには一つの知見となるに相異ない。

二本保幾「使用價值」概念に於ける認識の諸相（中央公論、四九卷一號、昭九・一、二九―三九頁）左右田喜一郎博士以來、この國に「經濟哲學」と稱する研究の分野がひろかれたが、經濟學と哲學との混血兒の肥立ち、かならずしも良好とはいひがたい。第一に、「使用價值」といふことばの意味が、「人間の經濟生活に關する直觀又は常識と學的認識との媒介を爲す一點だ」と主張されてゐるけれども、およそ經濟學上の基本概念を表す用語は、いづれも「直觀又は常識と學的認識との媒介を爲す一點」ならざるはないのである。限界效用說のエレメンタルな形態を是認するとか、しないとかいふことは十九世紀の議論であつて、

いまさら效用と味覺の混同がどうのといふのは、死兒の齡を數へるにひとし。問題は用語の意味にはない、限界效用派の學理そのものが、どこまで經濟現象分析の道具として役立ちつゝあるか否かにある。問題の設定をあやまることが「經濟哲學」の任であつてはならない。

氣賀健三 限界效用理論の擁護（三田學會雜誌、二八卷七號、昭九・七、二三―六三頁）

明石嚴三 費用と價值との究極的關係について（同志社高商論叢八輯、昭八・七）

安井琢磨 スウィージ「埃太利學派における主觀價值理論の解釋」Alan R. Sweeney, The Interpretation of Subjective Value Theory in the Writings of the Austrian Economists, Review of Economic Studies, vol. 1, No. 3, June 1934.（經濟學論叢、四卷九號、昭九・九、一三九頁―一四六頁）

井上鑑三 ^{エナルギ}勢力價值學說——國民社會主義經濟學の一齣——（商學、一五卷一六號、廣瀨高商開校十周年記念論文集、昭九・一〇、一六九―二〇四頁）目次。一、國民社會主義經濟、二、「勢力價值」概念、三、價値の種類、四、價格の形成、五、價值・使用價値の成立、六、諸價値の

起源、七、「勢力」價值學說の生成、八、客觀的價值學說の分裂、九、「勢力」量測定の限界、一〇、「公正なる賃銀」の公式と「比價」の概念。

價格理論

- 高田保馬 供給曲線の性質 (經濟論叢、三九卷二號、昭九・八、一九一三八頁)
高田保馬 不全競争について (經濟論叢、三九卷四號、昭九・一〇、一九一三六頁)
木村健康 ハロッド「不完全競争の理論」R. F. Harrod, Doctrines of Imperfect Competition (Quarterly Journal of Economics, vol. XL VIII, No. 3, May, 1934) (經濟學論集、四卷一號、昭九・一、一九一八九頁)
福地元吉 獨占資本主義と其の價格構成 (稻田經濟叢、昭九・一、九一一〇七頁)
手塚壽郎 Duopoly に於ける價格形成 (商學討究、九卷上、昭九・六、三〇一六二頁)
飯田 繁 フィッシャーの物價理論と物價安定論 (經濟時報、六卷四號、昭九・七、四一五頁)
磯部喜一 カルテル價格の變動に就いて (上) (關西大學々報、一七號、昭九・三、一一一〇〇頁)
磯部喜一 カルテル價格の變動に就いて

(下) (同上、一一八號、昭九・四、二二一七頁)

*

- 高田保馬 貨幣の將來効用について (經濟論叢、三九卷三號、昭九・九、一九一三四頁)
岩井 茂 日附貨幣の理論的根據 (商工經濟研究九卷一號、昭九・一、三五一七〇頁)
岩井 茂 日附貨幣の理論的根據 (同上、九卷二號、昭九・五、二七七八頁)
岩井 茂 日附貨幣の批判的研究 (同上、九卷三號、特輯、二五八〇頁)
高田保馬 ハイエクの景氣理論——新しき貨幣的景氣の理論を批評して自己の立場を明にす (經濟學論叢、四卷五號、昭九・五、一一六二頁)
谷川吉彦 チャーマーズの恐慌理論 (經濟論叢、三八卷二號、昭九・二、三九一五六頁)
安井琢磨 フリードリッヒ・ルツ「經濟學における景氣問題」Friedrich Lutz, Das Konjunktur problem in der Nationalökonomie, Jena, 1932, S. 176. (經濟學論叢、四卷一號、昭九・一、二二一九頁)
村瀬忠夫 景氣變動學說 (早稻田政治經濟學雜誌、三五號、昭九・六、七一九〇頁)
豊崎 稔 レエブケの二次恐慌論 (經濟時報、六卷三號、昭九・六、三一一四〇頁)
田中精一 波多野鼎教授「景氣論」(經濟學

五二

靜態・動態

- 論集、四卷一二號、昭九・三、二二一三〇頁)
鹽野谷九十九 シュンペーターに於ける經濟循環の構造 (橫濱市立橫濱商業專門學校研究論集七號、昭九・二、一一二六頁) 目次。一、問題、二、基本的範疇及び關聯の摘出、三、個人經濟的均衡、四、流通經濟的均衡、五、總括。
鹽野谷九十九 シュンペーターに於ける經濟發展理論の基本構造 (橫濱市立橫濱商業專門學校研究論集、八號、昭九・二、一一三二頁)
赤羽豐治郎 シュムペータの動態經濟學 (關西大學學報、一一七、昭九・三、三六一四〇頁)
赤羽豐治郎 シュムペータの動態經濟學 (同上、一一八、昭九・四、二五二七頁)
山口忠夫 シュンペーター理論の價值と意義——アモンのシュンペーター評 (經濟商業論叢、七號、昭九・六、一四〇一一五六頁)
田中精一 均衡理論に於ける動態論——純粹經濟學に於ける中山伊知郎氏—— (經濟集志、七卷三號、昭九・五、九一三五頁)
杉本榮一 純粹經濟學的發展——中山教授の近業「純粹經濟學」を讀みて—— (橋新聞、昭九・二・二)

安井琢麿 中山教授の經濟學體系——「純粹經濟學」について——（經濟學論叢、四卷五號、昭九・五、一三四—一四〇頁）

宮田喜代藏 中山伊知郎氏「純粹經濟學」

（商業經濟論叢、一二卷別冊、ブツクレヴエウ號、昭九・九、一一五—一三三頁）

大熊信行 中山伊知郎「純粹經濟學」（研究論叢、七卷一號、昭九・七、一四四—一四七頁）

中山伊知郎 景氣豫報の限界（經濟往來、九卷九號、昭九・九、九—二八頁）

小泉信三 讀書雜誌（中央公論、四九卷二號、昭九・二、一六一—一六九頁）

2「經濟表」と「純粹經濟學」1 マルサス書簡

河野吉男 マクス・アドラーの靜態的概念

（長崎高商研究館彙報、二二卷二號、昭九・二、一一—一二頁）

高橋泰藏 經濟動態理論と正常狀態の想定（商學研究、三號、昭九・一、一四—一八七頁）

柴田敬 擴張再生産表式について（經濟論叢、三八卷五號、昭九・五、一三六—一四二頁）

杉本榮一 均衡價格成立の過程（經濟學研究三號、昭九・七、九七—一二八頁）

加古撤次郎 經濟基礎構造發展の理論（關西大學報、一二三號、昭九・一〇、二四—二九頁）

梅田政勝 景氣變動論の構造（商業論叢、九

卷一號、昭九・六、一一—二五頁）

伊藤久秋 文獻に於ける靜態、動態の兩概念（元）（長崎高商研究館彙報、二二卷一號、昭九・一、一二—二〇頁）

資本蓄積・貯蓄

柴田敬 資本蓄積率の差異と固定資本（經濟論叢、三八卷一號、昭九・一、一三六—一五九頁）

柴田敬 資本蓄積率變化論補遺（經濟論叢三八卷二號、昭九・二、一一〇—一三七頁）

高田保馬 節約の矛盾について——ハイテクの節約的美論に對する疑問——（經濟論叢、三八卷五號、昭九・五、一九—三七頁）

鬼頭仁三郎 投資と貯蓄（經濟學研究、三號、昭九・七、一一九—一八〇頁）

小川福太郎 貯蓄及び貯蓄と金銀市場との關係に就いてのリストの所論（商工經濟研究、九卷三四號特輯、四五四—四八二頁）

田中精一 長期的景氣波動と資本蓄積の機構（經濟學論叢、四卷四號、昭九・四、九〇—一二九頁）

*長谷部文雄 ローザ・ルクセンブルグ資本蓄積論——帝國主義の經濟的説明への一寄與——（上卷）（昭九・七、岩波文庫、二二七頁、昭和〇〇）

*長谷部文雄 ローザ・ルクセンブルグ資本蓄積論——帝國主義の經濟的説明への一寄與——（中卷）（昭九・八、岩波文庫、二二九頁、昭和〇〇）

*長谷部文雄 ローザ・ルクセンブルグ資本蓄積論——帝國主義の經濟的説明への一寄與——（下卷）（昭九・一〇、岩波文庫、二二〇頁、昭和〇〇）

上巻の譯者例言には「この書は、カウツキの『農業問題、近代農業の諸傾向の概観と社會民主主義の農業政策』およびヒルファディングの『金融資本論』とともに、マルクス、エンゲルスよりレーニンに至る期間における、マルクス主義經濟學の主要著作に數へられてゐる。しかしこの書は、前掲の諸著述と同様に、重大な欠陥乃至誤謬を含んでをり、無條件に推薦されえないものとされてゐる。……この書にたいするや、詳細な批判は、ローゼンベルグ『資本論註解』第二卷や、コフマン監輯『マルクス主義經濟學』第一卷（邦譯第二卷）、山田盛太郎氏著『再生産過程表式分析序論』（改造社、經濟學全集、第十一卷）等について見られたい。」この岩波文庫では、上巻はマルクスの「資本論」第二卷における再生産の表式を詳細に紹介して、その解決の不十分なことを主張した第一篇を、中巻は

資本蓄積の問題をめぐる歴史的な論争を批判した第二篇を、下巻は蓄積問題にたいする著者自身の解決を展開した第三篇を、それぞれ含む。なほ、この書物にたいする諸家の批判への反批判であり、且つこの書物の内容の要約となつてゐる「資本蓄積再論」の翻譯も、ひきつゞき刊行の豫定であるらしい。譯出に際しては、さきの益田豊彦・高山洋吉兩氏の譯書を参照したとある。つまり、これは三度目の邦譯である。益田・高山譯は、昭和二年十一月に四六判の一冊本となつて、同人社から出た。横田千元譯は大正十五年三月および九月に、第一、第二分冊が菊判で白楊社から出た。第三分冊で完結する筈のところ、完結しなかつた。この譯書では上巻が原書の第一篇、中巻が第二篇、下巻が第三篇となつてゐる。第一篇再生産の問題、第一章研究の對象、第二章ケネーおよびアダム・スミスにおける再生産過程の分析、第三章スミス分析の批判、第四章マルクスの單純再生産の様式、第五章貨幣流通、第六章擴張再生産、第七章マルクスの擴張再生産表式の分析、第八章マルクスにおける困難解決の試み、第九

章流通過程の視角から見た困難。第二篇問題の歴史的叙述、第一論戰シスモンディーマルサスと、セイリリカアドーマカロックとの間の論争、第十章シスモンディの再生産理論、第十一章マカロック對シスモンディ、第十二章リカアド對シスモンディ、第十三章セイ對シスモンディ、第十四章マルサス、第二論戰、ロードベルツとフォン・キルヒマンとの間の論争、第十五章フォン・キルヒマンの再生産理論、第十六章ロードベルツスの古典學派批判、第十七章ロード・ベルツスの再生産の分析、第三論戰、スツルーズエーブルガコフツガン・バラノフスキー對ウォロンツォフ・ニコライオン、第十八章新版における問題、第十九章ウォロンツォフ氏と彼れの『過剰』說、第二十章ニコライオン、第二十一章スツルーズエーの『第三者』と世界の三大國、第二十二章ブルガコフと彼れによるマルクスの分析の補足、第二十三章ツガン・バラノフスキー氏の『不均衡』說、第二十四章ロシアの『合法的』マルクス主義の終焉。第三篇蓄積の歴史的條件、第二十五章擴張再生産表式の諸矛盾、第二十六章資本の再生産とその環境、第二十七

章自然經濟にたいする闘争、第二十八章商品經濟の導入、第二十九章農民經濟との闘争、第三十章國際借款、第三十一章保護關稅と蓄積、第三十二章資本蓄積の領域としての軍國主義。

分配論 一般

小山信雄 ウィックスティード「分配法則の体系化」The Coordination of the Laws of Distribution. by Philip Wicksteed. 1894. (The London School of Economics and Political Science Series, No. 12. 1932)

木村健康 岸本誠二郎「分配の理論」(經濟學叢書、四卷七號、昭九・七、八五—九九頁)

代用の弾力性

安井琢磨「代用の弾力性」(Elasticity of Substitution)に關する覺書——分配理論の最新用具について(經濟學叢書、四卷七號、昭九・八、六八—八九頁)

山田 勇 個人的需要函數の數學的理論(商業經濟論叢、二卷下、昭九・二、二五—二八六頁) R. G. D. Allen: A Reconsideration of the Theory of Value, Part II. (Economics,

May, 1924) の全譯。なお J. R. Hicks: A. Reconsideration of the Theory of Value. Part I. (Economica, Feb. '34) の數學的基礎。〔近時 Hicks, J. Robinson 等によつて理論經濟學特に分配論に導入せられて其重要度を増し來つた「代用の弾力性」Elasticity of Substitution に加ふるに、補充 Complementarity、所得、價格の各弾力性を價值論に應用したところに本論文の特徴が存在する。〕これによつて Cassen 以來 Jevons, Walras, Marshall 等の踏襲し來つた利用の可測性から離れ、更に又 Edgeworth, Pareto 等の所謂「利用函數指數」Utility function index から導かれる第二次偏微係數の符號の不定性からも脱することが出来る。此等の諸弾力性の概念は比較的新しい試みであつて、従つてそこには猶幾多の研究すべき餘地が残されてゐよう。」と指導者の成實清松教授は紹介の言葉を譯文の冒頭にそへてをり、譯者自身の手になる註が七頁にわたる。「經濟理論に興味を導き給ひし宮田喜代藏先生に對して、心からなる感謝の辭を捧げる」といふ譯者の言葉もみえる。

歸 屬 論

安井琢磨 歸屬理論と限界生産力説 ―純粹經濟學の二問題― (經濟學論叢、四卷四號、昭九、四、二八―八九頁)

和田佐一郎 價值歸算の問題 (東北帝國大學法文學部十周年記念經濟論叢、昭九、九、一―一六頁)
目次。一、序、二、ボーム・パウエルク及びウィザーに於ける價值歸算、三、マイヤーに於ける價值歸算、四、結語。

利 子 論

高田保馬 ベームの利子生産力説 (經濟論叢三八卷四號、昭九、四、一七一―三五頁)

青山秀夫 ヲイクゼルの自然利子論 (上) (經濟論叢、三九卷四號、昭九、一〇、九三―一二五頁)
青山秀夫 ヲイクゼルの自然利子論 (下) (同上、三九卷五號、昭九、一一、一〇二―一二四頁)

勞 銀 論

高田保馬 新勞銀基金説について ―ストーリーの試みに對する批評― (經濟論叢、三八卷六號、昭九、六、二四―四一頁)

大河内一男 慢性的失業と勞銀 (經濟學論

集四卷七號、昭九、七、二二―六五頁)

地 代 論

荻山健吉 オウストリア學派の地代論 ―ウィザーの農業地代論― (東北經濟論叢五號、昭九、六、一―三九頁)

樺田民藏 リュービーモフ著 松村四郎氏譯『地代論』(リュビーモフ著『地代論概要』一九三〇年版の邦譯) (大原社會問題研究所雜誌、一卷二號、昭九、八、四一―五二頁)

* 渡邊信一譯 カール・デュール、フォン・ボルトキウキツチ著 マルクス地代論に關する二つの批判的研究 (社會文庫、第一九冊) (昭九、二、日本評論社、四六判、譯者序三頁、本文二五八頁、附録) カール・デュール「カール・マルクスの經濟學體系中に於ける地代の理論」 K. Diehl: "Die Grundrententheorie im ökonomischen System von Karl Marx," (Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik, III. Folge, 17. Bd., 1899) (以下、フォン・ボルトキウキツチ「ロードベルトスの地代理論とマルクスの絶對地代學説」, von Bortkiewicz: "Die Robbensche Grundrententheorie und die Marxsche Lehne von

der absoluten Grundrente" (Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, I. Bd., 1911.) を収む。前者については説明の要なし。後者はロシア生れ、獨逸に留學し、一八九五年ストラスブルクで教職についたこともあり、一九〇一年ベルリン大學の員外教授に就任、一九二〇年より正教授となり、一九三一年歿す。

マルクス經濟學の批判者としてきこゆ。第一篇の目次。第一章マルクスの地代論の叙述、緒論マルクスの地代論の一般的諸前提、第一節對差地代、第二節絕對地代、第三節生産物の獨占價格に基く地代、第二章マルクスの地代論の批評、第一節緒論、第二節對差地代、第三節絕對地代、第四節結論。第二篇の目次。第一論文ロードベルトスの地代理論、一、ロードベルトスの地代理論の要旨、二、「材料の價值」の存否を標識として農業と工業とを對置し、それから地代を誘導することの問題、三、利潤均等化の法則との矛盾、四、「本源的價值法則」の歪曲に關するロードベルトスとリカルドとの關係、五、利子と地代との分離を説く段階に於ては利潤均等化の法則を要せ

ずとする立場、六、理論構成手段としての「正常價值」の優越性、七、「正常價值」を以て歴史的に「本源的」な價值なりとする見解、八、「重力の法則」としての「本源的價值法則」と利潤均等化法則、九、資本の有限性と利潤均等化法則の制限、一〇、結論。第二論文マルクスの絕對地代論の批判、一、問題、二、資本の有機構成を標識とする農業と工業との相違、三、利潤均等化の法則と絕對地代、四、絕對地代論の妥當範圍、五、對差地代の存在が絕對地代に及ぼす影響、六、批判——ロードベルトス及びリカルドと關聯させて。この方は原著に章節の區分がないのを、「讀者の便宜のため」といふ刊行者側の希望に従つて譯者の附けたものである。」

* 松村四郎譯リュビモフ著 地代論 (ナカカ社、昭九二、初刊、序文一四頁、本文四七〇頁、附註一〇頁、リビューモフ教授著「地代論概要」(モスクワ國立出版所、一九三〇年版)の全譯。原著者は第一モスクワ大學の教授、この書のほかに、「地代學說」、「農業問題」、「社會主義と協同組合」、「經濟學教程」の著述がある。近年ソヴェト・ロシアの學界にお

五六

ける地代論争で最も重要な役割を演じた。「最近わが國においても漸く地代論が論争の中心題目となり、河上、櫛田、向坂、猪俣、高田、林の諸家の間に行はれた激烈な地代論争は今尚ほ讀者の腦裡に新たなることと思ふ。」(譯者序) 引用文中邦譯あるものについては、それぞれ邦譯書の頁數を附記してあるのは親切である。目次(細目は略す)。第一部マルクス以前の地代學說、第一章アダム・スミス以前、第二章アダム・スミス、第三章ジェームス・アンダーソン、第四章ダーヴィド・リカルド、第五章リカルド地代論のブルジョアの批判、第六章アダム・スミス、アンダーソン及びリカルド体系の簡單なる對照(古典學派の地代學說)第七章チウネン、第八章ロドベルトス、第九章マルクス地代論に移行する必要、第二部マルクス地代論、第一篇地代論概説、第十章地代と價值理論、第十一章地代と剩餘價值、第十二章マルクスとリカルドの地代定義、第十三章地代の率と量、第十四章資本主義の發達が地代の増加に及ぼす影響と地代の増加が資本主義の發達に及ぼす影響、第十五章土地私有の害毒、第十六章農

業における資本主義の役割、第十七章マルクスの地代諸現象の分類、第二篇差額地代、第一篇差額地代の第一形態、第十八章豊度による地代、第十九章位置による地代、第二篇差額地代の第二形態、第二十章差額地代の若干特質、第二十一章差額地代第一形態と第二形態の相互關係について、第二十二章マルクス及びエンゲルスの圖解、第三篇最劣等地にも生ずる差額地代、第二十三章マルクスの差額地代理論、第二十四章リカルド及び最劣等地にも生ずる差額地代の理論、第四篇差額地代總論、第二十五章剩餘價值と地代、第二十六章生産價格と差額地代、第二十七章土地以外のものより生ずる差額地代、第二十八章超過利潤と差額地代、第二十九章絕對的豊度、相對的豊度及び差額地代、第三十章土地收穫遞減「法則」と差額地代理論、第三十一章豊度及び位置の差異の意義、第三十二章差額地代總額、第三篇絕對地代、第三十三章豫備的注意事項、第三十四章絕對地代の源泉、第三十五章絕對地代の若干の根本的性質、第三十六章絕對地代の安定性、第三十七章絕對地代と獨占地代、第三十八

章絕對地代と差額地代との間の差異、第三十九章資本主義の發達と各種地代の増進、第三篇マルクス地代論に關する若干の論爭問題、第一篇差額地代(耕地)は何處で形成されるか? 第四十章問題提起について、第四十一章穀物價值について、第四十二章穀物の價格及び差額地代源泉の所在について、第四十三章假面を被つたボズニヤコフの降服、第四十四章ボズニヤコフの新立場と新誤謬、第四十五章ボズニヤコフの新立場の舊誤謬、第四十六章差額地代源泉の所在に關するエス・ソレンツエフの説、第四十七章簡單な結語、第二篇プロレタリア國家における地代、第四十八章プロレタリア國家における絕對地代、第四十九章プロレタリア國家に於ける差額地代、第五十章再び若干著者達の混迷について、第五十一章ケ・ヴェ・オストロヴィチアノフの立場について、第三篇地代及び農業における生産の集積、第五十二章集積理論、第五十三章論爭と新事實、第五十四章集積理論に對する反對論、第五十五章農業における小生産の贊成者、第五十六章農業における生産集積の制動機としての地代、第五十七章プロレ

タリア國家における土地國有化及び大農生産の發達、第五十八章地代、生産集積及び農業協同組合、第五十九章地代の國有化とネオ・ナロードニクの降服、第六十章簡單な結語、結論地代學說の建設におけるマルクスの役割。——リカルドの主要な貢獻は、地代論と労働價值論とを結びつけたこと、すなはち地代が價值の一部だとしたことにある。しかし、かれには剩餘價值の範疇なく、したがつてマルクスのごとく地代とそれとを結びつけることができなかった。リカルドは地代を土地の「不滅な性質」の使用料と認めたが、土地に「不滅な性質」はない。マルクスは地代を價值をもたない生産手段(すなはち労働によつて生産されない生産手段)の使用權にたいして支拂はれる超過剩餘價值と認めた。「超過」といふのは、地代が支拂はれる時には、剩餘價值が二種類の生産手段所有者の間に分配されることを意味する。また、リカルドには生産價格の範疇がなく、したがつて商品の平均的「自然的」價格はその價值と一致することになり、社會的に必要な劣等地から同一量の労働によつて得られる農産物の價值

は、賃銀と利潤とに分配されるから、地代を發生させる餘地がないことになり、絶對地代の可能性は否定された。

國際貿易論

早川三代治 クールノーの國際貿易理論に對するバレートの批評（法經濟論叢二輯、昭九・一、五七—七四頁）

谷口重吉 均衡理論的貿易理論の一省察（研究と資料四號、昭九・二、五一—七一頁）

一、國際貿易理論上の兩學派、二、貿易の基礎概念、三、原理の擴充、四、結言。

經濟思想

高田保馬 植民の世界史的意義——貧乏ものは必ず勝つといふこと——（經濟論叢、三八卷一號、昭九・一、六三—八二頁）

高田保馬 道德としての貧乏（中央公論、四九卷七號、昭九・七、八七—一〇二頁）

作田莊一 現代の思想問題（經濟論叢、三八卷六號、昭九・六、四二—六二頁）

友松圓諦 佛教の經濟思想（經濟往來、九卷八號、昭九・八、五一—六〇頁） 一、佛教などに經濟思想があるか、二、なぜ佛教は經濟に

背いたやうに見えたか、三、現代に生きてゐる佛教經濟術語。

出口勇藏 デルタイの歴史研究に於ける資本主義觀（經濟論叢、三九卷四號、昭九・二〇、一三七—一四六頁）

石川與二 ヘーゲル市民社會論と經濟學（經濟論叢、三八卷一號、昭九・一、三四—三六八頁）

須永重光 アントロポロギイのイデオロギイ（東北帝大經濟學會研究年報、經濟學・一、昭九・二、七七—一〇五頁）

向阪逸郎 フリードリヒ・エンゲルス論——八月五日を記念として——（中央公論、四九卷八號、昭九・八）

故二木保茂 科學とドグマの鬭争（科學的精神の擁護）（早稻田政治經濟學雜誌三八號、昭九・二、二二—三九頁）

五來欣造 マルキシズムの三混同（早稻田政治經濟學雜誌、三八號、昭九・二、一一—二〇頁）

河野吉男 文化の自律性の問題——唯物史觀的立場、社會學史觀的立場を通じて見た一考察——（商業と經濟、一四卷二號、昭九・三、二〇〇—二一九頁）

酒枝義旗 常識、科學及哲學（早稻田政治經濟學雜誌、三六號、昭九・八、三五—五四頁）

麻生平八郎 資本主義の將來（一）（明大商學論叢、一五卷四號、昭九・二、二〇—二二九頁）

五八

麻生平八郎 資本主義の將來（二・完）（同上、一五卷五・六號、昭九・三、一四五—一八一頁）

全体にわたる目次。譯者の言葉、著者のまへがき、序、一、資本主義の現勢、1 經濟的見解の變化、2 秩序の變化、3 技術的變化、二、資本主義の將來の形勢、1 資本主義批判の諸理論、2 計畫經濟論、3 大眾教育と國家的規律、三、國民經濟とアウタルキー、1 アウタルキーに對する見解、2 獨逸とアウタルキー、四、結語。

赤羽豐次郎 シュパン教授とファッシズム（關西大學々報、一三二號、昭九・九、一三一—一六頁）

難波田春夫 ソムバルト「獨逸社會主義」Sombart, Duescher Sozialismus, 1934.（經濟學論集四卷、二號、昭九・二、九七—一〇六頁）

千種魁之 竹中教授校閲「生」の辯證法的發展としての國民主義（商學研究雜誌、二二號、昭九・二、一五一—一七八頁）

手塚壽郎 林要著「貨幣のない社會」（商學討論、八卷下、昭九・二、一七一—一七七頁）

大熊信行 杉村廣藏・二木保茂「經濟哲學」（研究論集、七卷一號、昭九・七、一三一—一三三頁）

理論・政策・實踐の關係

服部英太郎 獨逸社會民主々義社會政策

論の崩壊過程（東北帝國大學法文學部十周年記念經濟論集、昭九・九、五三九—七八二頁） 目次。

一、經濟民主主義理論と社會民主主義社會政策論——社會民主主義社會——經濟政策の指導的イデオロギーとしての經濟民主主義理論、生成過程、特にその基礎的理論構造とへの瞥見、二、合理化過程と社會民主主義社會政策論——社會民主主義勞働組合の生産政策的理論の展開とその歸結、三、「資本形成の問題」と社會民主主義社會政策論——特に「財政改革」を繞る社會民主主義社會政策の後退過程、四、賃銀に對する攻撃と社會民主主義社會政策論——社會民主主義勞働組合の賃銀政策に於ける公的理論の轉落過程とその終結に先立つ「四十時間勞働週」論の提起、五、計畫經濟理論と社會民主主義社會政策論——恐慌下に於ける經濟民主主義理論の再生——轉化形態としての社會民主主義計畫經濟理論と計畫經濟的失業對策論の構想——優に一冊の單行本を凌ぐ勞作である。

河合榮治郎 獨逸社會民主黨とマルキシズムの修正（經濟學論集、四卷六號、昭九・六、一—七九頁） 目次。一、緒言、二、獨逸社會民主黨と自由主義、三、獨逸社會民主黨と

社會改良、四、修正主義論争、五、修正主義論争の批判。

計畫經濟の問題

山本勝市 計畫經濟論批判のための覺書——ソ聯邦の實驗を中心として——（資源、四卷四號、昭九・九、一—二二頁）

山本勝市 計畫經濟論批判のための覺書——ソ聯邦の實驗を中心として——（資源、四卷五號、昭九・〇、一—一六頁） 全体にわたる目次。一、緒言、二、戰時共產主義時代とネップ時代の吟味、三、五ヶ年計畫時代の吟味、四、五ヶ年計畫時代に於ける重工業實績の吟味。

伊藤久秋 資本主義的經濟と計劃經濟に於ける投資（モツセ）（一）（長崎商工研究館彙報、三三卷六號、昭九・六、二〇—二八頁）

伊藤久秋 資本主義經濟と計劃經濟に於ける投資（モツセ）（二）（同上、三三卷七號、昭九・七、二—二三頁）

伊藤久秋 資本主義經濟と計劃經濟に於ける投資（モツセ）（三）（同上、三三卷八號、昭九・八、二八—三八頁）

佐々木吉郎 ローヴィンの計畫經濟論（一）（明大商學論叢、一五卷三號、昭八・一二、八三一—二〇二頁）

（明大商學論叢、一五卷三號、昭八・一二、八三一—二〇二頁）

佐々木吉郎 ローヴィンの計畫經濟論（二）（明大商學論叢、一五卷四號、一三〇—一四九頁） 全体にわたる目的。一、はしがき、二、計畫經濟の意味、三、計畫經濟の型、四、計畫經濟反對論の批判、五、世界計畫、六、計畫化の踐約。

酒枝義旗 ゴットル「計劃經濟の幻想」（早稻田政治經濟學雜誌、三三號、昭九・三、一一—一三三頁）

小宮孝 ゴットルの計劃經濟理論——計畫經濟と資本主義の變革を中心問題として——（商學評論、一二卷三號、昭八・一二、一五七頁） 同誌前號所載の「計劃經濟と資本主義の變革」の續篇。編輯者の都合により表題あらたまる。

商業教育における學科目編成の問題

商業教育における學科目編成の問題

松井辰之助 高等商業學校における商業及經濟學科目整理の必要（經濟時報、五卷一〇號、昭九・二、二—一三〇頁）

渡部明 大學商科に於ける學科目に就て（經濟法律論叢五卷一號、昭九・七、一四—一五四頁）

参 考 文 献

大塚久雄 **株式會社發生史の理論**（經濟學論集、四卷一號、昭九・一、四三—九二頁） 目次。

はしがき、一、基本的問題について、A 問題への端緒、B 原始資本、初期資本の集積集中、二、株式會社發生史論の諸型、A 學說史的概観、B ゴムバルト型「合名會社か株式會社か」とその検討、C ジルバーシュミット型「家族團體・合名會社・株式會社」とその検討、三、原始資本・初期資本の集中過程としての株式會社發生史、A 集中過程における結合と支配「個人企業・合名會社・株式會社」、B それの初期資本主義的環境による制約。

馬場敬治 **經濟學の問題としての「國防と經濟」に關する一般的考察** 一特に、國家の政策が經濟社會に生ずる諸結果の研究方法を示す一例として—（經濟在來、九卷五號、昭九・五、一三—五二頁） 目次。一、本稿の問題、二、國防に於ける成果と原價、三、國防に於ける副成果と副原價、四、國防活動に於ける總体的結果、五、採らるべき政策に關する一般的考察。

伊藤久秋 **カルテルの諸問題**（商業と經濟、一四卷二號、昭九・三、一—四二頁） 目次。一、カルテル概念に於ける二點、（一）カルテルを獨占体にあらずとする見解に就て（二）カルテルは横斷的結合たることに就て、二、カルテル組成力の問題、三、カルテルの生産費に及ぼす影響（カルテルの合理化的性質に就て）。

木下 彰 **農業國と工業國の問題** —アドルフ・ワグナーの見解に就いて—（研究年報、一號、昭九・二、一〇六—一五二頁）

伊藤久秋 **不確定的消費地と工業定地** —ウェーバーの理論への一補足—（商業と經濟、一五卷一號、昭九・九、九三—一二六頁）

渡邊信一 **資本家的企業國と農家經濟圈との勞働力需給關係**（經濟學論集、四卷三號、昭九・三、一—七三頁） 目次。はしがき、一、給源を指標とする就業勞働者の分析（その二）二、同上（その二）四、求職狀態に在る勞働力の分析を透して、五、農家經濟圈の勞働力の配屬先。

上田貞次郎 **我國の人口構成と職業問題**（改造、一六卷一〇號、昭九・一〇、二—一五頁）

早田正雄 **職業に關する一考察**（經濟集志、七卷三號、昭九・五、三六—七六頁） 目次。一、はしがき、二、職業の意義、三、職業の種類、

四、職業と失業率、五、社會事業の對象となる人の職業、六、結語。

六〇

小田橋貞壽 **職業人口より見たる戦後の我國産業**（關東學院商學、一號、昭九・三、八一—九〇頁）

早川三代治 **旭川市に於ける所得分布**（法經濟論叢、三輯、昭九・二、四五—五五頁）

松田武雄 **土地に關する經濟學的一考察**（法經濟論叢、二輯、昭九・一、二五七—二八二頁）

大野彌曾次 **國民經濟の趨向**（山口商學雜誌、一五號、昭九・七、一一—二八頁）

小島昌太郎 **購買力**（經濟論叢、三八卷二號、昭九・二、一六—三八頁）

確永厚次 **消費經濟論（其四）** —消費者保護と消費の制限—（商業論集、九卷一號、昭九・六、一〇三—一五三頁）

確永厚次 **消費經濟論（其五）** —消費水準と生活水準—（商業論集、九卷二號、昭九・一一、四七—九二頁）

福島文人 **需要と消費**（丘人、二二二號、昭九・二、一〇四—一二三頁）

小宮孝 **經濟學の實用性**（關西學院大學商學論叢、一號、昭九・二、一五一—一八八頁）

松井清 **商業に關するマルクス説の一批判者**（經濟論叢、三九卷五號、昭九・一一、一三—一四〇頁）

西野入 德 生物學的人口論 (早稻田政治經濟學雜誌、三八號、昭九・一二・八一—一〇〇頁)

土方成美 我貿易の趨勢を逼じて見たるアウルタルキー (經濟學論集、四卷八號、昭九・一一三五頁)

菊田貞雄 オータアキ祖上の日本人人口問題 (明治學院高商論叢、五號、昭九・一二・一一三〇頁) 目次。一、序、二、人口問題の意義、三、日本人口問題の性質、四、自然増加人口對策の可能性、五、結論。

河野吉男 アウタルキー (Autarkie) に関する一研究 (一) (長崎高商研究館彙報、二二卷一〇號、昭九・一〇・一五—二二頁)

中山昌樹 カルヴィン主義と資本主義精神 (明治學院高商論叢、五號、昭九・一二・一四六—一六九頁)

N. Skene Smith: British Economic Theory during the last Four Years. (經濟學論集、四卷三號、昭九・三・七四—九九頁)

經濟學史

古代ギリシヤ

難波田春夫 ゲオルゲ派の「新しきプラトンの姿像」 (經濟學論集、四卷七號、昭九・七・一〇〇—一五頁)

山本光雄 アリストテレスの經濟學 (大倉學會誌、改四號、昭九・一二・三九—五六頁)

小泉 功 アリストテレスの貨幣觀 (大阪商科大學經濟研究年報、五號、昭九・六・二九七—三三四頁)

高橋誠一郎 アリストテレスの生涯と其の政治理論 (三田學會雜誌、二八卷九號、昭九・一一五〇頁)

* 高橋誠一郎 アリストテレス (社會科學の建設者—上—學說叢書) (昭九・一二・三卷堂、四六判、口繪一葉、序文三頁、本文二四頁、附、日次。緒言、第一章背景、(一) 民族的社會の崩壊、都市的國家の發生、(二) 自然經濟より貨幣經濟への推移、(三) 相對的人口過多と植民地建設、(四) 商工業の發達と政體の變化……ソローンの改革、(五) 平原黨、海岸黨及び高地黨の軋轢……ペイシストラトスの

僭主政治、(六) クレステネスの改革……民主政治の發達、(七) 小農民の窮狀、(八) 西紀前第五、四世紀に於ける雅典工業の特徴、(九) 雅典の貿易的進出、(一〇) 雅典の收入、(一一) ペリクレス時代の雅典に於ける國家的負擔の増加、(一二) ペリクレス時代以後に於ける雅典の社會不安、(一三) 西紀前第四世紀に於ける雅典の經濟的回復、(一四) 領域的國家マケドニアの勃興、希臘都市國家の滅亡、第二章生涯、(一) マケドニア宮廷に仕へたる醫師の子：アカデミア入門、(二) 師プラトンの感化、(三) 探求至難なるアリストテレスの思想發達の跡、(四) アカデミア時代の對話篇、(五) アソス時代、(六) マケドニア王國世嗣の指導者、(七) アレクサンドロス大王とアリストテレス、(八) 雅典脱出とハルキス退去中の死、第三章學說、(一) ソヒスタイ、(二) ソクラテース及びプラトーン、(三) アリストテレスの「政治學」、(四) プラトーンの共產主義に對する批評、(五) 中層有産階級的政治理論、(六) 奴隸制度擁護論、(七) 民主主義的國家の社會倫理的批評。——此の小篇を草するに當つて依據した書籍は、アリストテレス及び古代希臘人の著作のみならず、現

代學者の其れに於いても、可成り多かつたのであるが、現代の著作中に於いて特に依頼する所の多かつたものは、グロート、ゴンベルツ、イエーガー、マックイルウエイン、グロツ、ジャルデ、ロストヴェッフ、パーカー及び「劍橋古代史」執筆の諸學者であつた。アリストテレスの貨幣、利子、取財

術、奴隸制度等に關する理論は舊著「經濟學前史」(昭和四年、改造社版)中に稍や詳細に之れを紹介したが爲めに、爰には唯だ僅かに觸るるのみに止めた。」(序文)とある。この叢書の各冊に通ずる「發刊の辭」には、「他方に於て我々の祈念は本叢書を以て社會教育の一端に充てることに在る。すなはち、社會科學を教科書の塵くさい非現實性から救済し、廣やかな教養の具として之を一般讀書界に向つて開放することである。」といふことばが見える。たとへば上田辰之助博士の「トマス・アクキナス」の序文の冒頭にも、「『人と學說』叢書の計劃が提案され、論議され、遂に決定されるにあたり、關係者等の腦裡に終始強く印象付けられてゐた一つの中心觀念といふやうなものがあつた。それはこの叢書を以て社會

教育の一助にしたいといふ念願であつた。」とあるからみである。

大野純一 古代希臘に於ける貨幣思想 (商學討論、八卷下、昭九・二、一三九頁)

聖トマス

*上田辰之助 トマス・アクキナス (社會科學の建設者人と學說叢書) (昭九・一、三省堂、口緒一葉、一序代へて二六頁、本文二七六頁、附一)

目次。第一篇トマス・アクキナス、第二篇トマスの社會思想、一、トマスに於ける「社會」、二、社會の目的、三、職分社會、第三篇トマスの政治思想、一、統治、二、統治者、三、一人による統治、四、國王の特質、(一)五、國王の特質、(二)六、國王の任務、(一)七、國王の任務、(二)八、國王の報酬、九、專主に對して市民は如何に善處すべきか、一〇、現實上の最良統治形態、(一)一一、現實上の最良統治形態、(二)第四篇トマスの經濟思想、一、財の意義、二、財の所有、三、經濟緊急權、四、財の使用、五、財の交換、六、ウーズラ、七、勞働。——トマスの社會思想は現代の日本青年に何を教へるであらうか、……それ

は先づ秩序(ordo)といふことを教へる。

この秩序は萬物が其の下に歸一する超自然的權威に統制される。その統制には一定の階序がある。従つて自然界の事物には各々の處とその順位とが定められてをり、下位のものは上位のものの統制を受けることとなる。かくして人類の物資所有權が確立せられると同時に人事の秩序においても全部對部分の關係として社會が個人に優先することとなる。トマスはこの後者を最高の正義として道德其の者の眞髓とたたへられる所の全体的正義の名を以て呼んでゐる。第二に、平和(Pax)を教へる。……第三にトマス社會思想は「美」(Bona)を教へる。……第四、トマスは目的(Fin)と手段(Officia et Dea)との區別を明確にすべきを教へる。……第五に、トマスの社會思想が職分(Officium)原則の上に築かれてゐることは私共に教ふる所頗る大であるといへよう。(序に代へて)

上田辰之助 聖トマス協同體思想より觀たる Potestas Procurandi et Dispensandi の意義 —— 中世所有觀念の一考察 —— (經濟學論集、四卷二號、昭九・一、一四二頁) 目次。

一、はしがき、二、序説、三、個人主義説、四、團體主義説、五、折衷説、六、協同体倫理とトマス財産論、八、Potestas Pauperandi et Dispersandi、九、右に關する諸説、一〇、私見及び其の論據、一一、Usus Communis とふくこと、一二、結語。

小田信士 **聖トマスの Usus について**——中世經濟思想史研究の一編——（經濟評論、一九號、昭九・七、一—三四頁）

大熊信行 **上田辰之助「聖トマス經濟學」**（研究論集、七卷一號、昭九・七、一三七—一三八頁）
高谷道男 **中世基督教經濟思想史の一面**（關東學院商學、一號、昭九・三、三—三二頁）

スミス以前

田中亮一 **マーカンチリズムの貿易思想に就て**（東北經濟論叢、五號、昭九・六、七五—九六頁）
目次、一、緒言、二、マーカンチリズム發生の時代及其經濟的背景、三、マーカンチリズムの政策、四、マーカンチリズムの理論、A 貨幣論、B 貿易論、五、結論。

*本位田祥男 **マルチン・ルッター**（社會科學の建設者と學說叢書）（昭九・一一、三省堂、四六

判、口繪一葉、はしがき三頁、參考書六頁、本文二一三頁、附一）
目次、第一部ルッターの時代、一、序詞、二、中世社會の行詰り、三、貿易の發展と獨占、四、工業の資本主義化と階級構成、五、鑛山業の發展、六、金融資本の活躍、七、農村の疲弊と激情、八、法

王廳の世俗化と搾取、九、政治的情勢、第二部ルッターの生涯、一、生立ち及修業時代、二、法王廳との闘争、三、新敎の建設と農民戦争、四、結婚と指導、第三部ルッターの社會及經濟思想、一、根本思想、二、政治思想、三、經濟思想、四、資本主義精神との差、五、農民戦争を中心として（農民への同情、暴力の批判）。——度々傳記が小説よりも面白いと云はれるのは、小説家が其頭の中に作り出した性格よりも、現實な人の性格がより面白い所から來るものであらう。それにも拘らず普通の傳記が左程面白くないのは、其把握の仕方、表現の仕方に缺けてゐる所があるからであらう。素より其表現の拙さは覺悟の上であるが、私はできるだけ、其の時代とルッターの個性を掴む事に力を注いだ。先づ其背景である社會的情勢を述べ、ルッターの生涯

を語り、其性格の思想への表現を見た。此意味で此は私の創作である。」（はしがき）とある。

高橋誠一郎 ヒューグス版カンチロン著「**商業一般の本質論**」（三田學會雜誌、二八卷七號、昭九・七、二—一八頁）

*増井幸雄 **ケネー**（社會科學の建設者と學說叢書）（昭九・一一、三省堂、四六判、口繪一葉、表二頁、自序六頁、本文二〇〇頁、附一）
目次、

第一章ケネーの生涯、一、農家の子・外科醫となる、二、田舎の外科醫、三、外科醫學會の秘書、四、侍醫、五、哲學者・經濟學者、六、晩年、七、人物、第二章ケネーの著作、一、醫學上の著作、二、哲學上の著作、三、經濟學上の著作、四、數學に關する著作、五、著作集、第三章ケネーの哲學的學說、一、研究法、二、自由、三、自然法、第四章ケネーの經濟學說、一、富の生産、二、富の流通、三、租税、四、經濟的統治の箴言。——「從來ケネーに關する解説書に餘り多く現れて居ない哲學的の方面の事柄に少しなりとも觸れ得たこと、其の經濟學說については初期以來の著作を參考して聊か獨自の解説を試み得たことをとを

以て、暫らく自己を慰めるの外はない。」

「本書を書くに當つて、シエル氏の著作とオンケン教授編纂のケネー著作集とに助けられたことが甚大であつた。」(自序)

向井 章 ケネーの「經濟表」の秩序の理論のために(一)(山口商學雜誌、一五號、昭九・七、二八—二五八頁) 要目。一、問題の所在と其の限定、二、關係資料の選定、三、同時代の學者の批判、四、今日迄此の問題は如何に取扱はれ來つたか、五、「表」の理解に對する準備(結言) 本號では第三まで發表。

松浦 要 ミラボーのフィジオクラット前期に於ける農業論(經濟商業論叢、七號、昭九・六、一—二〇頁)

アダム・スミス

大道安次郎 アダム・スミス經濟學の性格——スミス經濟學の研究その一(商學評論、一二卷四號、昭九・三、五七—八八頁)

岡橋保 アダム・スミスの貨幣本質觀(内外研究、七卷四號、昭九・七、一—三三頁)

岡橋保 アダム・スミスの貨幣價值觀(經濟論叢、三九卷六號、昭九・二、一〇七—一二五頁)

白杉庄一郎 アダム・スミスの廉價即豐富論(經濟論叢、三九卷二號、昭九・八、八四—一〇四頁)

大道安次郎 テオドル・ビュツ著「アダム・スミスに於ける經濟學說と世界觀」——アダム・スミス經濟學說研究の一つの眼として(商學評論、一二卷三號、昭八・二、一三七—一四七頁)

マルサス

上田貞次郎 マルサス逝きて滿百年(中央公論、四九卷一—號、昭九・一、七八—八七頁)

高田保馬 マルサスと近代的景氣論(經濟往來、九卷一—號、昭九・一、〇—三三頁) 一、マルサスとマルクス、二、マルサス人口法則の修正、三、マルサス恐慌論の骨子、四、マルサス恐慌論と近代的景氣論。

堀 經夫 經濟學史上に於けるマルサスの地位(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、二九—五五頁)

坂本彌三郎 マルサスの經濟理論——特にマルサスの需給論(彼の價值論の一節)——(商學討究、一八七—二一八頁)

大野純一 マルサス對リカアドオの價值論爭(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、二五—

三—二八二頁)

高橋次郎 マルサスと英國古典派の勤儉理論——特に價值論との關聯に於て——(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、二八三—三三三頁)

手塚壽郎 伊太利に於けるマルサスの先驅者(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、五三—九一頁)

渡邊一郎 人口思想史の一研究——マルサス直前史——(拓殖大學論集、五卷一號、昭九・一〇、一五五—一七四頁)

南亮三郎 マルサスの人口理論(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、一四三—一八五頁)

伊藤久秋 マルサス對ゴッドウインの人口論爭(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、二一九—二五一頁)

吉田秀夫 マルサス以後の人口理論(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、三二五—三六三頁)

小泉 丹 マルサスとダーウキン及び社會ダーウキンズム(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、三六五—三九六頁)

室谷賢治郎 マルサスと其の社會經濟史的背景(商學討究、九卷中・下冊、昭九・二、九三一—九四二頁)

吉田秀夫 マルサス批判者としてのジャロルド(商學討究、八卷下、昭九・二、七三—九五頁)

吉田秀夫 『人口論』を纏る論争——平等主義を中心として——(大育學會誌、改二號、昭八・六、一九一九頁)

吉田秀夫 南教授の批評に答ふ(同上、改二號、昭八・二、五一—六三頁)

上田貞次郎 マルサスと現代の人口問題(商學討論、九卷中・下合冊、昭九・二、一一—二八頁)

伊藤久秋 ケインズのマルサス傳を読む(商業と經濟、一四卷二號、昭九・三、二九五—一三〇頁)

南亮三郎 吉田秀夫著『マルサス批判の發展』(前著批評に對する著者の答辯に觸れて)(商學討論、八卷下、昭九・二、一八五—一九四頁)

リカアドオ

末永茂喜 リカアドウの貨幣論(研究年報經濟學、一號、昭九・二、一五—七六頁)

朴 克采 リカルドオの比較生産費說について(經濟論叢、三八卷五號、(昭九・五、一〇〇—一二三頁)

渡邊一郎 リカアド研究(一)(拓殖大學論集、三卷二號、昭八・二、八九—一八頁)

渡邊一郎 リカアド研究(二)(同上、四卷一號、昭八・二、八八—〇九頁) 兩號にわたる全体の目次。一、提言、二、リカアド經濟

學の本質、三、勞働價值說、四、價值說の修正、五、地代說、六、賃銀說、七、利潤說、八、外國貿易論、九、機械論、一〇、結語、一一、リカアドの生涯。

渡邊一郎 サミュエル・ベリーの價值論——リカアド勞働價值說批判！(經濟評論、二〇號、昭九・二、四一—五八頁)

* * *

谷口吉彦 古典派における恐慌論と動態論との關係(經濟論叢、三八卷三號、昭九・三、三三—五五頁) 目次。一、問題の意味、二、スミスにおける動態研究、三、リカアドウにおける動態研究、四、マルサスにおける動態經濟、五、ジョン・スチアートの動的應論。

谷口吉彦 恐慌と蓄積と植民——ミルおよびウエークフィールドを中心として——(經濟論叢、三八卷一號、昭九・二、三六—三九頁)

黒田謙一 古典學派の經濟理論と植民・植民地觀(同志社論叢、四五號、昭九・六、九四—一三六頁)

* 山田雄三 チューネン分配論の研究(昭九・四、森山書店、四六判、緒言五頁、本文二五〇頁、附録三一頁、索引一〇頁、附註一頁) チューネンの分配論は、一面ではリカアドの構想と相通じ、他

面では、限界生産力説の先驅となるべき思想を包蔵する。「近代的价格理論と結びつく分配論は何れかといへば生産諸要素の需要方面に力點を置くものであるが、チューネンにあつてはリカアドからの發展としてむしろ生産方面或は供給方面に於ける働きから所得の意義を考へんとする分析があり、この關係は私には棄て難きものに思はれるのである。又、彼の「孤立國」なる思考形式が經濟の自己規定を純粹に展開せんとする理論的操作として、常に現實を經濟的に條件づけるものを求めてゐることは、私の反省して見たいと思ふ點の他の一つである。……チューネンの方法から學び得ることは一旦成立した經濟から有用な働きを求め、外部の諸事情と離さずに而かもそれ自身の固有の作用を見出すといふ見方である。……私の意圖は以上二點を中心としてチューネン分配論の意義をできるだけ消化したいといふにある。」(緒言) 日本におけるチューネン研究には、さきに單行本として、近藤康男「チューネン孤立國の研究」(昭・三)があり、雜誌論文には、手塚壽郎、寺尾琢磨兩氏のそれがある。「孤立國」も近

藤氏の手によつて邪譯された。著者はチューネン解釋において近藤氏と異なるものあることを緒言で一言する。なほ、その後の興味は、生産論（農業組織論）にむかひ、「エングレンダーやブレドエルの最近の研究に顧み、それが經濟と技術との交渉に關する極めて有意義な理論的展開であると考へ、専らその解釋に腐心しつゝ今日に至つてゐる」といふ。著者は井藤半彌、中山伊知郎兩教授の誘掖に感謝してゐる。目次、第一章チューネン學說の地位、一二、分配論の理論的課題について、三、チューネンと英國古典學派、四、チューネンと近代分配論、第二章著書としての『孤立國』と方法としての『孤立國』一、チューネンの生涯作、三、勞働問題への關心と『孤立國』、第二部、四一六、方法としての『孤立國』、七・八チューネンの思考形式の特徴、第三章農業圈分布の理論と差額地代論、一・二、農業圈分布の理論に於ける地代論の役割、三・七、地代の決定、八・九、チューネンとリカアドとの異同、十・十一、『孤立國』遺稿中の地代論、十二、絶對地代、第四章勞銀及び利子の生産力説、一・三、問題及び諸前提、四、資本

の生産力、五、勞働の生産力、六・七、兩者の關係、八、クランク説との比較、十一・十二、資本額、利率、資本生産費等の規定、十三、總括的な表示、第五章自然勞銀論、一・三、自然勞銀論の要點、四・五、ジェ・エル・ムーア其他の批評について、六・八、自然勞銀と生産力勞銀、第六章分配論と價格（價值）論との關係、一・二、チューネンのリカアド評、三・四、その吟味―勞働價值説と生産費説、五・七、生産費説に對するチューネンの態度―報酬均等の理論、八、生産費と使用價值、九、分配論と價格（價值）論との關係、第七章結論、一、獲得としての分配關係、二、チューネンの二元觀、三、補論―テロー農場に於ける利益分配制度について、第八章總譯二篇―『孤立國』遺稿、第一『勞銀利子間の關係に關する研究結果と諸觀察』（『孤立國』第二部第二編第一章）、第二『地代の成立の諸原因』（同第四章中）、附録一チューネン年譜、附録二チューネン書目、一、チューネン自身のもの、二、チューネンに關するもの、索引。

* 五島茂 **ロバート・オウエン**（社會科學の建設者人と學說叢書（昭九二一、三省堂、四六判、

六六

口給、一、自序一頁、二二三頁、* 〓〓〓 目次、ぶろろろく、第一部轉換時代、一、イギリスの傷口、二、産業革命、第二部人間の生長、三、ニウタウン、四、世の中へ、五、變革の巨瀾に乗つて、六、眞理の歟葉、七、戀愛結婚、第三部ニウ・ラナアック、八、荊棘の道、九、反營利主義闘争、十、ブラックスフィールドの家、十一、二つの性格は生活する、十二、新らしき社會觀の提唱、第四部幼稚園創世紀、十三、オウエンと教育、十四、ニウ・ラナアック小學校と成人教育、十五、誰が幼稚園を始めて創つたのか？十六、『忘れられた開拓者』、第五部 Only Way Out、十七、一挿話、十八、『社會改良者のメッカ』十九、工場立法制定への道、二十、The Only Way Out、二十一、協同社會、えびろろく、文獻。――『ロバート・オウエン（Robert Owen）（一七七一一一八五八）は生きてゐる鑛脈だ。どの方面から掘つても鑛石は無限に出てくる。それは時代と共におもはぬ光をおびて迫つてくるようだ。近代資本主義のあらゆる病惱は、夙にこの異常な頭腦に最も多角的に映り、あらゆる打開策はそこから啓示された。近代的

協同思想、協同社會・協同組合・労働者福祉施設・大労働組合・労働交換所・國際労働局・新結婚觀等々の創唱と實踐とを通して、長き生涯のあらゆる瞬間を大衆のために働いた。本書はそのオウエンのペン・ポートレートである。」(自序)といふ。

宇野弘藏 **ブレントノーとティール** — 税關税に關する彼等の爭論について — (研究年報、一號、昭九・二、一五三—一九〇頁)

。内藤越夫 **カール・カウツキー文獻** (一) (大原社會問題研究所雜誌、一〇卷三號、昭八・一、一一五—二頁)

ウェブレ

古岸美貞 **ウェブレの經濟思想** (同志社論叢、四五號、昭九・六、一二六頁)

。菊田貞雄 **ソースタイン・ウェブレ** — その生涯と發生經濟學に就いて — (明治學院高商論叢、四號、昭八・二、三七—八五頁) 目次。一、序、二、生涯、三、業績、A 著書より觀たるウェブレの特異性、B 評論家としてのウェブレ、C セオリストとしてのウェブレ (1) 人間性觀 (2) 動態制度觀、D 經濟思想史上に於けるウェブレの地位、E ウェ

ブレの思想的感化。

。伊藤孝一 **ウェブレの「技術家と價格制度」の研究** (早稻田政治經濟學雜誌、三二號、昭八・九、一六三—一七八頁) 目次。トーステン・ヴェブレの生涯・本書とテクノクラシーとの關係・本書の主題・ヴェブレの特徴とそのテクノロジ・觀・ビジネスの分析・現代産業に於ける技術家の位置・技術家革命論。

論史的叙述

和田佐一郎 **ツガン・バラノフスキーの恐慌論** — 恐慌論史の一稿として — (研究年報經濟學、一號、昭九・二、一一—一四頁)

。中村佐一 **貨幣數量説の展開** (早稻田政治經濟學雜誌、三二號、昭八・二、一一—一二八頁)

柴田敬 **貨幣的景氣論史** (經濟論叢、三九卷一號、昭九・七、一〇五—一二六頁)

柴田敬 **貨幣的景氣論史** (同上、三九卷二號、昭九・八、六一—七三頁)

小松芳高 **獨占思想史概見** — Mund 著 Monopoly, a history and theory を讀む — (稻門經濟、八號、昭九・一、四七—五七頁)

富永祐治 **A ウェーバー貿易理論史概説** A. Weber, Zur Dogmengeschichte der The-

orie des internationalen Handels(Handels- und Verkehrspolitik, 1933, S. 379—401)

(經濟時報、六卷五號、昭九・八、四一—五〇頁)

* 關未代策 **經濟學史講義** (上卷) (昭九・九、明治大學出版部、菊判、序二頁、本文二〇七頁、附圖)

著者は小林正三博士のあとを承けて、明治大學に經濟學史を擔當す。さきに「ゴッサ經濟學史」の翻譯あり。目次。第一章古代希臘羅馬の經濟思想、第一節プラトーン、第二節クセノフォン、第三節アリストテレース、第四節羅馬の經濟思想、第二章中世の經濟思想トマソ・ダクイノ、第三章重商主義と官房學、第一節重商主義、第二節官房學、第四章重農主義、第一節ケルネー、第二節テュルゴ、第五章正統學派、第一節アダム・スミス、第二節マルサス、第三節リカード、第四節ジェー・エス・ミル。表題にも示すごとく、講義のテキストとして用ゐるために刊行されたもののやうである。なほ、下巻は今年一月刊行され、第六章社會主義、第七章歴史學派、第八章限界效用學派となつてゐることを附記しておく。

* 二本保茂 **全訂版經濟學史概論** (明華社、昭

九・三、菊判、腰寫三七頁、（註）講義用プリントらしい。目次。第一章古代ニ於ケル重要ナ經濟思想、第二節ざりしや時代、一、ふらと一、二、ありすと一とる、第二節ろ一ま時代、第二章中世ニ於ケル重要ナ經濟思想、第三章近世ニ於ケル經濟學成立以前ノ概觀、第一節重商主義、第二節自然法ノ思想、第四章經濟學ノ成立、第一節重農主義、一、重農主義ノ先驅者、二、ふらんそあけねー、第二節あだむすみす、一、あだむすみすノ先驅者、二、すみすノ經濟學說、第五章古典派經濟學ノ發展、第一節だういづどりかーど。さて、これで完結した形になつてゐるのは妙である。奥附を見ると著者の檢印もついてゐるから、著者承知のうへの出版であることは疑へない。

* 加田哲二・増井幸雄・小泉信三・高橋誠一郎 **經濟學史**（經濟學全集、第四九卷）（改造社、昭九・二、四六判、四九一頁、（註））1 獨逸經濟學史概觀（加田、五一—一四五頁）、2 佛蘭西經濟學說研究（自由學派研究の一節）（増井、一五三—二七二頁）、3 マルクシズム（小泉、二七七—三三三頁）4 近世英國經濟學史（高橋、三四一—四九一頁）の四篇よ

りなる。——獨逸經濟學史概觀の目次。第一章古典哲學の社會經濟觀、第二章正統學派のドイツ經濟理論に對する影響、第三章ドイツ・マンチエスタア學派、第四章ロマンチカアの社會經濟思想、第五章舊歴史學派の經濟思想（その一）、第六章舊歴史學派の經濟思想（その二）、第七章社會政策の主張、第八章新歴史學派の方法論、第九章歴史學派に對する批判。依據されるところの多かつた文獻等は別に示されてゐない。

——佛蘭西經濟學說研究の目次。第一章ジェルマン・ガルニエ、一、ケネーとスミスとの調和の企て、二、カンティヨンの攝取、三、國家職能論、第二章ジャン・バティスト・セイ、第一節研究方法論、第二節生産論、第三節交換論、第四節分配論、第五節消費論、第三章フレデリック・バステア、第一節經濟學と經濟生活、第二節價值、富、所有、第三節價値の生産、第四節價値の分配、第五節國家の職能。はしがきにいはく、「範圍を自由派の前半のみに限ることにした。『廣く淺く』よりも『狹く詳しく』の方法を選んだからである。猶ほ第一章は、Edgard Aulx 教授の論文に據つて書き、第

二章には既發表の諸論文の一部分又は大部分を利用した。——マルクシズムの目次。

1 前言、2 マルクス、エンゲルス年譜、3 マルクス・エンゲルスの人物、4 マルクシズムの特色概説、5（エゲル）、6 フォイエルバッハ、7 佛蘭西社會主義者の影響、8 マルクスと經濟學、9 唯物史觀と實踐、10「共產黨宣言」、11 價値論餘剩價値論、12 産業豫備軍說、13 販路缺乏説、14 價値論餘剩價値論に對する批評、15 産業豫備軍說批評、16 唯物史觀批評。著者の附記にいはく「マルクシズムに就いては從來度々の機會に論述して居り、其大部分に就いて私の意見は變易してゐないから、本篇に於ても新舊の自著を頻りに利用した。」重に利用されたものは「近世社會思想史大要」（岩波書店）「マルクシズム」（岩波講座世界思潮）「ラッサアル労働者綱領」解説「労働者綱領」と「共產黨宣言」（岩波文庫）「マルクシズムとボルシェビズム」（千倉書房）「價値論と社會主義」（改造社）「マルクス死後五十年」（改造社）。わづか六〇頁たらずで、マルクシズムの全般にわたつてゐる著作はめづらしい。——近世英國經濟學

史の目次。第一章アダム・スミス、第二章トーマス・ロバート・マルサス、第三章デウィッド・リカードオ、第四章英國社會主義者、第五章ナッソー・ウィリアム・シイニオア、第六章ジョン・スチュアート・ミル、第七章ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズとアルフレッド・マーシャル。著者のことばに、「私は昭和四年、『現代經濟學全集』の第七卷として『經濟學史』を出し、方法論及び價值論を主として經濟學成立以後の經濟學說の發達を略述せんと努めたのであるから、重複を避けて、本篇は大体に於て、分配理論、特に貨幣學說の發達變遷に就いて英國經濟學說史を述べんことを期した」(傍點は解題者)とある。

*堀經夫 三谷友古共譯 ユランニー・ウンゲル著 **現代經濟學概觀** (昭九・四、日本評論社、判別、譯者序八頁、目次二二頁、本文四九七頁、人名索引二頁、¥ 350)

„Die Entwicklung der theoretischen Volkswirtschaftslehre im ersten Viertel des 20. Jahrhunderts“ 1927 の邦譯 Economics in the Twentieth Century. The History of its International Development, 1931 は同書

の英譯である。著者はハンガリアの人、一九二九年アメリカからの歸途日本にたちよつて以來、譯者堀博士と親交あり、まだ少壯の學者だといふ。この翻譯は、主として獨逸語原本より、英譯書で訂正増補されてゐるところは、それにしたがひ、著者から譯者への書面にもついた訂正もあるとある。六頁にわたる原著者の日本版への序文は見おとしてならない。「中立的視角から、私は、西洋の種々の言語範圍に於ける諸經濟理論の間に存在してゐる諸々の深淵を橋渡しすることに對して貢獻せんと試みた。」「學說史を書くには三つの方法がある。第一は純記述的方法であつて、これは過去の諸學說を單にその時間的順序に従つて叙述するものである。第二は批判的方法であつて、この場合には、著者は、他の人々の意見に關する『批判的』見解を提示せんと試み、勢ひ彼れ自身の思想の絕對的正當性を強調する結果、正直な讀者に科學的發展の意識的に歪曲された一面的な姿を示すことになる。第三の最良の方法は發生的方法であつて、これは、一般的に行はれてゐる諸學說を、それら自身の發展から、且つそれ

らの内的關係に於て、説明せんとするものである。本書はこの發生的方法の諸原理に従はんと試みた。』また、つぎのやうにもいふ、「私は、一般に看過されて居りそして多くの研究者にとつて入手し難い諸雜誌論文を、多分に採用せんと努めた。諸々の極く謙遜な雜誌論文が屢々最も重要な新發見を包含してゐるものである。」「この書物では、しかし、貨幣論が除外されてゐる。その理由の第一は、『現在の狀態によれば、貨幣論は、大多數の場合に於て、經濟理論の一つの統一的な有機的部分を形成してゐない』といふことである。なほ、讀者は、すくなくとも限界效用の基礎概念、歸算論、古典的分配論等をすでに熟知してゐるものと豫定される。最後に、この書物はドイツ語、フランス語、イタリア語、イギリス語で書かれた著書だけをとりあつかひ、それ以外には及んでゐない。それについて、著者は尊敬すべき正しさをもつて、つぎのやうにいひつてゐる。自分はスペイン語の文献及びスラヴ語の文献の大部分だつて取扱ひ得た筈だ。しかし、さういふことをするのは、自分の母國語たるハンガリー語の著書

を取扱ふのおなじく、いづれも正當でない。といふのは、自分の語學力を以つてしては、より、重要なスカンディナヴィア及びオランダの經濟理論を取扱ふことが出来なから、著書全体が、著者の語學力の偏頗によつて、偏頗にされるおそれがあるのだと。この學說史の第一の特徴が、經濟學の發達を、ドイツ、ロマン（フランス・イタリア）およびアングロ・サクソンの三國語の系統において、分割的に述べるといふ方法にあることはいふまでもない。幸にして右の三國語は、西洋經濟學の最近四半世紀の發展における最も重要な貢獻を包含してゐるといふのである。この書物は驚くべき範圍にわたつて文獻を涉獵してゐるから、譯書を手にした人は、諸問題に關する無數の貴重な文獻わけでも雜誌論文の所在をあまりよく知ることができるといふ利益を眞先に感知するであらう。目次。緒論。國民經濟學の發展に於ける言語範圍に依る分離、第一篇。最近に於ける經濟理論上の諸傾向の哲學的淵源、一、バーデン哲學派、方法問題及び國民經濟學に於ける價值哲學、二、「沒價值」國民經濟學の哲學的基礎、三、マー

ルブルヒ哲學派、カッセル及びリーフマン、四、コント、スベンサー及び經濟均衡論、五、功利主義的倫理學、ケンブリッヂ學派及び經濟的自由主義、六、シュタムラー及び社會法的經濟論、七、ドイツ理想主義哲學の復活及びシュパン、ハタルドの「間心學」の思想體系、九、アメリカに於ける哲學的樂觀主義及びクラーク學派、一〇、新アメリカ心理學及び經濟的制度主義、第二篇。ドイツ語の範圍に於ける發展、第一章方法と組織化、一、激しい方法論爭の鎮靜、二、論理的思潮、三、價值判斷に關する論爭、四、精密比較研究法、五、經濟哲學、六、私經濟學、經營經濟學及び世界經濟學、七、戰爭經濟學、第二章體系構成の企圖、一、歷史學派、二、純粹限界効用說、三、シエンベーターの靜態論及び動態論、四、カッセル及び彼れの追隨者、五、レクンス及びアドルフ・ウェバーの現實的な交換經濟論、六、リーフマンの純心理的體系、七、有機的及び目的論的思想、八、社會法的傾向、九、社會改良家の學說體系、一〇、其他の人々、一一、教科書、第三章價值、一、ボエーム・バヴェルクとワイザーとの

七〇

價值論に於ける意見の衝突、二、シュパンに於ける均等重要性の學說、三、客觀的價值論への復歸、四、特殊的な説明の企圖、五、「瀕死の」價值論、第四章價格、一、限界効用說の價格論、二、リーフマン「純主觀的な」價格説明、三、「純客觀的な」解決、四、綜合的企圖、五、シュパンに於ける有機的・全體的價格論、第五章分配、一、限界効用說と分配論、二、價格論に基く分配問題の解決、三、社會的分配論、四、價格構成からのレンテの導出、五、收益遞減の法則の一般化、六、都市地代、七、ボエームの打歩說に關する議論、八、利子の動的説明、九、利子に關する獨占說、制欲說及び生産力說、一〇、舊勞賃論思想の發展、一一、限界効用說による勞賃の説明、一二、社會主義的勞賃論、一三、動的企業者利潤論、第三篇。ロマン語の範圍に於ける發展、第一章方法、一、ロマン語の範圍の國民經濟學に於ける「方法論爭」の缺如、二、ローザンヌ學派の方法、三、非數學的演繹法、四、論理的及び認識論的努力、五、統計的及び歴史的・歸納的見地、六、社會學的思想傾向の影響、七方法に於ける一般的发展

傾向、八、國民經濟學の組織化に於ける改
 新の缺如、第二章體系構成の企圖、一、ロ
 ーザンヌ學派の學說體系、二、折衷的に樹
 立された抽象的の演繹的學說體系、三、フラ
 ンスに於ける古典的の自由主義派、四、價
 值論なき合理主義的體系、五、歴史的の相
 對主義的思想の影響、六、連帶主義的見地
 に立つ社會的思想、七、宗教的及び倫理的
 傾向、八、社會主義的學說體系、九、教科
 書、第三章價值、一、ローザンヌ學派と價
 值論、二、ロマン諸國に於ける純粹限界價
 值論の貧弱なる成果、三、客觀的傾向と主
 觀的傾向とを調停せんとする努力、四、再
 生産費に關する論争、五、最近に於ける費
 用價值論の發展、六、タルドの文化哲學的
 基礎に立つ價值論、七、「經濟的便宜」の學
 說、第四章價格、一、數學的價格論、二、
 古典的需要供給法則に關する鬭争、三、社
 會的勢力關係からの價格説明、四、「正當」
 價格、第五章分配、一、經濟均衡説を基礎と
 するイタリアの分配論、二、フランスに於
 ける現代的及び古典的分配論、三、分配論
 に於ける勢力思想及び社會倫理的見地、
 四、收益法則の統一化、五、レント理論の

擴張、六、消費者レント、七、利子問題に
 對するローザンヌ學派の態度及び貯蓄論、
 八、ロマン諸國に於けるボエームの打歩説
 の影響、九、利子論の部分的淺薄化、一〇、
 イタリアに於ける社會倫理的勞賃論、一
 一、ルヴヌール、コルネリサン及びシミ
 マンに於ける現實的な勞賃説明、一二、フ
 ランスの勞賃論に於ける限界原理及び社
 會倫理的見地、一三、企業者利潤に關する
 獨占説及び折衷的説明、一四、差額利潤、
 第四篇イギリス語の範圍に於ける發展、第
 一章方法、一、數學的方法、二、論理的企
 圖、三、心理學的原理に關する論争、四、ア
 メリカに於ける一般的な現實主義的思潮、
 五、アメリカ經濟學會に於ける方法論上の
 論争、六、「少壯アメリカ」、七、法律的、
 歴史的及び社會倫理的見地、八、價值判斷
 の問題、九、「經營經濟學」「管理學」及び
 戰爭經濟研究、第二章體系構成の企圖、一、
 イギリスに於けるケンブリッジ學派及び其
 他の抽象的の理論的學說體系、二、アメリ
 カに於けるクラーク學派、三、フィッシャー
 に於ける貨幣及び利子の思想、四、デヴン
 ポートに於ける企業者の見地、五、フェッ

ターの發展、六、カーヴァ及びアメリカに
 於ける戦後の其他の理論的學說體系、七、
 現實的及び倫理的の宗教的學說體系及び社
 會改良論者、八、教科書、第三章價值、
 一、アングロ・サクソンの價值論に於ける
 指導的な妥協的見地、二、特に社會的方向
 に於ける非効用説の發展、三、勞働價值論
 を救護せんとする企圖、四、デヴンポートの
 擬客觀的價值論、五、フェッター、アン
 ダースン及び限界效用價值に對する抗爭、
 六、アングロ・サクソン國民經濟學に於ける
 全價值論の漸次的退却、第四章價格、一、
 マーシャルの價格論及び其發展、二、需要
 の見地よりする價格説明、フェッター、三、
 クラークの價格論及び價格限界の分析、
 四、費用の見地、五、獨占價格、六、「正
 常」價格及び價格變動、第五章分配、一、
 現代のイギリス理論に於ける分配問題、
 二、アメリカの限界生産力説、三、財の分
 配と社會的價格鬭争、四、オーストリア學
 派の歸算論の發展、五、狹隘なるレント概
 念の克服及び收益問題、六、新しく認識さ
 れたレント的性質を有する所得、七、古典
 的差額レント、八、イギリスに於ける新利

子論の缺如、九、アメリカに於ける生産力思想と利子論、一〇、資本概念に關する論争、一一、アメリカに於けるボエームの利子論の採用、一二、アメリカの利子論に於ける制欲思想、危険要素及び殘餘原理、一三、イギリス文獻に於ける勞賃問題、一四、アメリカに於ける現代の勞賃生産力説、一五、勞賃基金説、一六、ムーアの歸納的な勞賃説明、一七、勞賃水準の問題、一八、企業者利潤論に殘存せる古典的生産力思想の影響、一九、危険と利潤、二〇、企業者利潤に於ける殘餘原理と動的要素、二一、獨占所得としての利潤、總括及び展望、索引。

* * *

宇野弘藏 **フリードリッヒ・リストの『經濟學』**「經濟學の國民的体系」(東北帝國大學法文學部十周年記念經濟論集、三七五—四三八頁)

。福地元吉 **ジョン・ラスキンの道德的經濟思想** 目次。序、一、社會批評家としてのラスキン、二、正統派經濟學とラスキン、三、價值論、四、微利論、五、結論。

高橋誠二郎 **デュー・ヂ・アール・ガイガー氏著**

『**ヘンリー・チョーチの哲學**』(三田學會雜誌、二八卷八號、昭九・八、一一五—一二四頁)

山崎義三郎 **ヘンリー・ジョージ經濟學の基礎理論**(國民經濟雜誌、五六卷一二號、昭九・三、八七—九九頁) **ジョージの經濟學の根本思想と題した二層よかつたかもしれない。**

それは「神學的」である。
阿部矢二 **マーシャル小論**(同志社高商論叢、八輯、昭八・七、一—七頁)

荒木光太郎 **ケインズ素描**(中央公論、四九卷二號、昭九・二、二四三—二五〇頁)

日本經濟學

* 小野武夫 **佐藤信淵**(社會科學建設者・人と學說叢書)(昭九・一、三省堂、四六判、口繪一葉、序三頁、本文二四六頁、B・C) 目次。緒論、第一章佐藤信淵の時代、第二章佐藤信淵の家

歷、第三章佐藤信淵の思想の淵源、第四章經濟學說、第五章農業史論、第六章農業學說、第七章農政學說、第八章社會改良論、第九章海防論、第十章帝國主義論、結論。

* 野村兼太郎 **荻生徂徠**(社會科學の建設者・人と學說叢書)(昭九・二、三省堂、四六判、口繪一葉、序三頁、本文二二二頁、B・C) 目次。第一

七二

章時代と生活、一、世相—經濟的變化、二、元祿時代、三、白石時代、四、享保時代、五、準備時代(幼年期より青年期まで)、六、活躍時代(晩年に至る)、第二章學問的生活、一、「蕨園隨筆」以前、二、徂徠學の完成、三、徂徠評、第三章批判の立場、一、「政談」と「太平策」、二、武士中心的—制度の確立、三、復古的—その歴史觀、四、實證的—その教育論、第四章貨幣經濟批判、一、物價騰貴の原因、二、金銀と物價、三、錢貨論、四、町人論、第五章社會制度改革論、一、土着論、二、都市政策—江戸、三、戶籍法、四、その實行、第六章結論、す、社會經濟思想史上の地位、二、その先驅者、三、その後に來たるもの。——「わが國に於ける社會科學の建設者は誰かと云ふ問題を出されて、最初に心に浮んだ者は荻生徂徠であつた。彼が儒學の方面に於いても、又教育學の方面に於ても、獨創的な意見を出してゐるが、社會思想、經濟思想の方面にあつても、その封建理論を大成せる者として、彼の名は擧げられなければならない。勿論理論的に完備せる者を云へばその以前に山鹿素行がある。しかし貨幣經濟

の發展する時期に際し、それから生じた諸現象を批判して、徳川時代を通じて核心的思潮の根源となつた封建的理論を建設した者と云ふ點から見れば、徂徠を先に立てねばならないであらう。」(序)引用の漢文が、讀者の便宜のために、のこらず那譯され、假名も平假名に統一されてゐるのは、ひととである。

福澤諭吉

堀 經夫 西洋經濟學の輸入と福澤諭吉 (經濟時報、六卷三號、昭九・六、一一二〇頁)

藤野 靖 福澤先生と其の著述及び經濟論——福澤先生生誕百年記念に際して——(商業論叢、九卷一號、昭九・六、一五五—一九二頁)

山本美越乃

高木眞助 山本美越乃博士著書論文目錄 (經濟論叢、三八卷一號、昭九・一、四六二—四七一頁)

高木眞助 山本美越乃博士年譜 (經濟論叢、三八卷一、昭九・一、四五七—四六一頁)

櫛田民藏

櫛田民藏氏著作目錄 (大原社會問題研究所雜誌、一卷六號、昭九・二、八一—八九頁)

長谷川如是閑 櫛田君と新聞記者 (中央公論、四九卷二號、昭九・二、三三六—三八頁)
森戸辰男 櫛田君の學問的風格 (中央公論、四九卷二號、昭九・二、三三八—三四二頁)

二木保幾

故 二木教授の年譜及重要著作目錄 (早稻田政治經濟學雜誌、三七號、昭九・一〇、一三七—一三八頁)

伊藤秀一

伊東俗吉 伊藤秀一教授逝く (三田學會雜誌、二八卷八號、昭九・八、一二五—一三一頁)

* * *

* 住谷悅治 日本經濟學史の一齣 (昭九・六、大畑書店、菊判、序文五頁、本文四一〇頁、※※※)

著者はこの書を父母および叔父住谷天來に獻すると序文にかいてゐる。著者は「大塚金之助氏の整然たる体系を有つた明治經濟思想史の研究プラン」(日本資本主義講座)を見て、自分のプランなどは、「氏の壯大な体系の一部分に沈没し終つてゐることを知り、敢て私などが貧弱なものを書く必要がなくなつたことを喜び、ひたすら氏の研究の成就を待ちつゞけた」といひ、急に渡歐することになつて、昭和二年以來發表した

ものをまとめて出版すべく、笠信太郎氏の手にわたしたものだと思つてゐる。表紙にも扉にも見えないが、目次の表題には「自由主義經濟學と歴史學派」といふサブ・タイトルが見えてゐる。目次。第一章自由主義經濟學の成立、緒論の一、資本主義的生産機構の前提的な諸條件、緒論の二、明治初期の諸思想、本論の一、自由主義經濟學の成立、A 自由主義經濟學の移入、B 神田孝平著「農商辨」の經濟學史的意義—重農主義への反擊、C 神田孝平譯「經濟小學」と資本主義的生産機構の理論的基礎づけ、D 福澤諭吉著「西洋事情」と「民間經濟錄」—自由主義經濟學の成立、本論の二、自由主義經濟學成立の社會的根據、A 幕府時代における經濟的段階—商業資本・高利貸資本の制覇、B 資本主義生産方法の構成と自由主義經濟學、第二章ラーネッ博士の經濟學說、第一節「七一雜報」紙上の自由貿易論、A ラーネッ博士の經濟學講義案について、B 明治自由主義經濟學とラーネッ博士、C 伊勢雄氏譯「經濟學略說」と自由貿易論—最初の學說、第二節宮川經輝氏譯「經濟新論」、A ラーネ

ッド博士の講義案、B『經濟新論』、C『經濟新論』における資本主義社會觀、D資本主義社會の貧困救済策、E社會主義への言及、F社會主義史上における同志社とラーネッド博士、第三節ラーネッド博士の社會主義・共產主義・無政府主義批判(細目省略)、第四節「社會主義」譯字、第五節我國における「社會主義」といふ語の最初の使用——安部磯雄氏の一文を讀みて、第六節明治初期における社會主義の説述、第七節ラーネッド博士の講義について、附記ラーネッド博士の人物、第三章日本自由主義經濟學の完成——田口鼎軒博士の經濟學——第一節自由主義經濟最後の明星、第二節田口博士の經濟理論、A經濟學の定義とその批判、B自由貿易論、第三節日本資本主義の發達と田口博士、第四章日本歴史學派、第一節日本歴史學派總説、Aはしがき——日本歴史學派の意識化、Bわが國における歴史學派の萌芽——その社會的根據、C社會政策學會の發展消滅——歴史學派の特質、D第二期における歴史學派——マルキシズムへの對抗と否認、E最近における日本歴史學派とその轉化形態、第二

節日本歴史學派發生とその積極的主張、A大島貞益氏の「情勢論」、B自由貿易の否定としての保護政策の理解、Cその社會的根據、第五章日本社會政策學會の發生と發展、第一節日本資本主義の發達と近代的無產者の發生、第二節自由放任論と社會主義これが否定の否定としての社會政策學會の出現、A自由主義經濟學の輸入とその文獻、B自由主義への疑義——勞働問題・社會問題の出現——金井延博士・和田垣謙三博士の貢獻、Cその現實的背景としての勞働運動・社會運動の勃興——社會主義的諸文獻の刊行、第三節日本社會政策學會の沿革、Aその發生——「社會政策學會趣意書」の發表、B「社會民主黨」の組織に對する社會政策學會の「辯明書」、C明治四十年、社會政策學會の規定とその社會的活動、D世界大戰後の社會情勢と社會政策學會の消滅、第四節社會政策學會の社會的性質、A社會問題に對する當時の進歩的見解——自由放任主義と社會主義との克服——勞資協調論、社會主義者よりの攻撃——桑田熊藏博士と片山潜氏との論争——安部磯雄氏および河上肇氏の批判、C

七四

自由放任主義論者よりの駁撃——田口鼎軒博士と葛岡信虎氏との論争、D日露戦争および世界大戰後における社會政策學會、第五節社會政策思想の發展と變質、A福田徳三博士の謂ゆる「日本社會政策の第二期」の宣言、B福田徳三博士の所謂批判、C世界大戰後の社會運動の再勃興と社會政策思想、第六節社會政策の立場、A社會政策の立場とその發展、B社會政策とマルキシズムとの對立、C社會政策における理想、イ、社會政策と理想社會、ロ、社會政策と階級對立の廢止、ハ、社會政策における國家、D社會政策學者の唯物史觀否定。右のうち、異様なほど精細をきはめてゐるラーネッド博士といふは、一八七五年(明治八年)にアメリカから來て、新島襄氏の京都同志社創立に協力した人、一九二八年に歸米。著者は同志社大學法學部教授として、この人について調査するには特別の便宜をもつたらしい。題して經濟學史といふが、一面、經濟思想史といふにちがひない。

財政學

- 井藤半彌 政策論の形式としての目的論
(大倉學會誌、改四號、昭九・一二、一三三頁)
- 井藤半彌 最少社會價值主義の租稅原則論
(經濟評論、二〇號、昭九・一二、二五—四〇頁)
- 松野賢吾 租稅の最高原則 (商業と經濟、一四卷二號、昭九・三、四三—六七頁)
- 永田清 テレオロギーの財政學 — Karel Engels を中心として見たる — (三田學會雜誌、二八卷八號、昭九・八、一—三六頁)
- 高橋誠一郎アレクザンダー・ハミルトンの財政經濟論集 (三田學會雜誌、二八卷一二號、昭九・一二、一〇九—一二一頁)
- 吉田昇三『國民財産問題について』(一)
(内外研究、七卷五號、昭九・九、五三—六四)
- 吉田昇三『國民財産問題について』(二、完)
(同上、七卷六號、昭九・一二、四七—五七頁)
- 大畑文七 所得循環の圖表化に就て (内外研究、七卷一號、昭九・五、一一—二一頁)
- 大畑文七 租稅經濟の發展限度 (經濟論壇、三八卷四號、昭九・四、七七—九五頁)
- 三谷道麿 租稅の本質 (經濟論壇、三八卷五號、昭九・五、八四—九九頁)

財政學

- 松野賢吾 租稅轉嫁論(メーリング) (三)
(長崎商學研究會報、二三卷一號、昭九・一二、三〇頁)
- 松野賢吾 租稅轉嫁論(メーリング) (四)
(同上、二三卷四號、昭九・五、二八—四二頁)
- 松野賢吾 租稅轉嫁論(メーリング) (五)
(同上、二三卷六號、昭九・七、二九—三六頁)
- 松野賢吾 租稅轉嫁論(メーリング) (六)
(同上、二三卷七號、昭九・九、三三—三六頁)
- 松野賢吾 租稅轉嫁論(メーリング) (七)
(同上、二三卷一〇號、昭九・一二、二二—二九頁)
- 長谷田泰三『名譽』革命の財政史的意義
(研究年報、一號、昭九・一二、二二—三三頁)
- 藤谷謙二ヘンゼルの地方稅制論 (經濟時報、六卷一號、昭九・四、七一—八〇頁)
- 永田清『赤字財政論』— Unbalanced Budgets, by Dalton, Thomas, Redman, Hughes and Leaning, 1934 を讀み — (三田學會雜誌、二八卷一二號、昭九・一二、一四—一四八頁)
- 神戸正一ヒードールトン編『赤字財政』 Unbalanced Budgets. A Study of the Financial Crisis in Fifteen Countries, by Hugh Dalton, Britley Thomas, J. N. Redman, T. J. Hughes, and W. J. Leaning, xii and 468 pages. London, 1934.
- 土方成美 世界不況と赤字財政 (資源、四卷六號、昭九・二、一—七頁)
- 内田勝司 財政難とインフレーション (明大商學論叢、一五卷四號、昭九・二、一二—二五頁)
- 安藤春夫 公債操作とインフレーション
事象 (經濟學研究、三號、昭九・七、一八一—三六頁)
- 山下覺太郎『財政社會學』の意義および方法 (その一) (國民經濟雜誌、五六卷六號、昭九・六、八八一—〇六頁)
- 山下覺太郎『財政社會學』の意義および方法 (その二) (同上、五六卷一號、昭九・七)
- 全体にわたる目次、一、序言、二、『財政社會學』のテーマ、三、『財政社會學』の意義および課題、四、『財政社會學』の對象、五、『財政社會學』の方法、六、結言。
- 神戸正一 F. K. マン『租稅社會學』 Fritz Karl Mann, Beiträge zur Steuersociologie. (Finanz-Archiv. N. F. Bd. 2 Hft. 2. S. 281—S. 314)
- 山下覺太郎 イタリアに於けるファシズムの國家財政 (國民經濟雜誌、五六卷四號、昭九・四、一五六—一七〇頁) Gerhard Dobbert, Die staatliche Finanzwirtschaft im faschistischen

- schen Italian (Finanz-Archiv, N. F., Bd. 2, Heft 2, 1934, S. 324—332) の紹介。
- 竹中龍雄 **計畫經濟と官公營事業** (經濟時報、六卷四號、昭九・七、一一—二〇頁)
- 伊藤武夫 **所得稅に現れたる諸獨裁政治** (内外研究、七卷三號、昭九・五、三七—六三頁)
- 歐洲大戰中に於ける列國の戰費財源概説 (Harvey E. Fisk: The Inter-Ally Debts. 1924) (資源、四卷二號、昭九・七、四五—八〇頁)
- 次。一、英國の納稅記錄、二、佛蘭西に於ける歲入徵收、三、伊太利の戰時歲入、四、露西亞の戰時財政、五、米國の戰時課稅、六、獨逸の戰時歲入。
- 花戸龍藏 **統制經濟的課稅政策の一學說** (カール・マン教授の新國庫收入主義の課稅論と其批評—國民經濟雜誌、五六卷一號、昭九・一、二七一—五五頁)
- 長谷田泰三 **英國に於ける國債の發生過程** (東北帝國大學法文學部十周年記念經濟論集、昭九・九、四三九—四九一頁)
- 藤谷謙二 **イギリスに於ける受益者負擔制の變遷** (經濟時報、五卷一〇號、昭九・一、三一—三九頁)
- 伊藤武夫 **英國所得稅の創設** (一) (内外研究、七卷五號、昭九・九、四二—五二頁)
- 伊藤武夫 **英國所得稅の創設** (二・完) (同上、七卷六號、昭九・一二、三八—四六頁)
- 平 實 **英國消費組合と所得稅賦課問題** (經濟時報、六卷二號、昭九・五)
- 柏井象雄 **公式に依る累進に就いて** (經濟論叢、三九卷三號、昭九・九、一三六—一四八頁)
- 神戸正雄 **所得の綜合累進課稅に就きて** (經濟論叢、三九卷三號、昭九・九、一—七頁)
- 高木壽一 **現代租稅制度に於ける一般取引稅の地位と其本質** (三田學會雜誌、二八卷一二號、昭九・一二、四一—六九頁)
- 藤谷謙二 **租稅と特別課徵** (經濟時報、六卷九號、昭九・一二、二二—三〇頁)
- 小山田小七 **國債借換問題に就いて** (經濟時報、六卷六號、昭九・九、一一—二〇頁)
- 神戸正雄 **酒の專賣に就きて** (經濟論叢、三八卷一號、昭九・一、二四—四〇頁)
- 神戸正雄 **印紙稅に就きて** (同上、三八卷二號、昭九・二、一一—一五頁)
- 神戸正雄 **砂糖消費稅に就きて** (同上、三八卷三號、一一—一八頁)
- 神戸正雄 **取引所取引稅に就きて** (同上、三八卷四號、昭九・四、一一—一六頁)
- 神戸正雄 **相續稅と登録稅との交錯** (同上、三八卷五號、昭九・五、一一—一八頁)
- 神戸正雄 **不動産の登録稅に就きて** (同上、三八卷六號、昭九・六、一一—二三頁)
- 神戸正雄 **鑛業稅に就きて** (經濟論叢、三九卷四號、昭九・一〇、一一—一八頁)
- 神戸正雄 **フロイデன்பルク「補助金」** Hans Erich Freudenberg, Die Subventionen als Kreislaufproblem in Marktwirtschaft und Staatswirtschaft. Beiträge zur Finanzwissenschaft N. F. 2, Tübingen, 1934, VIII u. 96 S. (經濟學論集、四卷一一號、昭九・一二、九八—一〇四頁)
- 田中喜一 **自動車交通と道路財政** (商業論集、九卷一號、昭九・六、二七—七三頁)
- 阿部賢一 **増稅の妥當性と臨時利得稅** (早稻田政治經濟學雜誌、三八號、二二—三二頁)
- 北山富久二郎 **「豊かな」臺灣の財政** (臺北帝國大學文政學部研究年報、一號、昭九・五、四四五—五〇六頁)
- 高砂恒三郎 **農村地方稅輕減問題** (經濟時報、五卷一號、昭九・二、五一—六〇頁)
- * 宮崎力藏 **財政經濟總說** (昭九・青木尚修堂、菊判二五七頁、¥1.50)
- * 井藤半彌 **財政現象の實證研究** (經濟評論、一八號、昭八・一二)

概観

A 前年度未公刊された『純粹經濟學』(中山伊知郎)が學界に直接およびした刺激と影響・ジュンペネアおよび中山伊知郎の業績にたいする紹介・紹述批評の累積。——動應論の構造。B 柴田敬助教授(京大)のマルクス蓄積論の吟味。——ローザンヌ學派からマルクスへ、また杉本榮一(東京商大)教授のマルクスから數理派へ、いづれにせよ、兩者とも兩者の綜合へ。C 高田保馬博士は依然として精力的に、勢力・生産力・供給曲線・貨幣・景氣・利子・勞銀等、理論的分野のあらゆる問題へ、そして一層廣汎な讀者層にむけては『貧者必勝』の理を、そして『マルクス經濟學論評』(菊判約四百頁)の大集成。——近年におけるマルクス經濟學論争史の生ける姿。博士の論敵の一人櫛田民藏氏、この年に永眠。

D 上田貞次郎博士及びそのグループによる我國人口の實證的研究の發展。E マルサス死後百年記念、小櫛高商『商學討究』によつて企てられた學界網羅の一大論集。

概観

F 『社會科學の建設者・人と學說叢書』(三省堂)の刊行計畫及びその一部計畫の達成。

G 山田雄三教授(東京商大)著『チューネン分配論の研究』、住谷悅治氏(前同志社大學法學部教授)著『日本經濟學史の一編』後者は經濟思想史といふに近い。H 翻譯で、リュビモフの『地代論』(松村四郎氏譯)、原著者は現にモスクワ大學教授、これに、カール・デール、フォン・ポルトキウッチ兩者の『マルクス地代論に關する二つの批判的研究』(渡邊信一氏譯・社會文庫)が對應する。ハンガリアの俊秀ウンゲルの著作『現代經濟學概観』(堀經夫・三谷友吉兩氏共譯・菊判約五百頁)の日本版、原著者序文附の公刊。I 福澤諭吉生誕百年記念、新聞雜誌に多少の文獻散見す。櫛田氏の外に山本美越乃博士(京大教授)、二木保幾教授(早大)、伊藤秀一教授(慶大)、この年永眠。J マルクス經濟學に關する文獻の刊行は減少したが、消滅してゐない。むしろ翻譯の出版が一定の流れのあることを示す。リュビモフの外にローザの『資本蓄積論』(長谷部文雄氏譯・岩波文庫)が日本語としては三度目の計畫であることを思へ。

K アメリカの獨創家ヴェブレンの死は前年度に歸す、その後二三の紹介を見た。

L 計畫經濟の問題、——モッセ、ローヴィン、ゴットル、ランダーワール等々の翻譯・紹介が賑ふ。國民精神文化研究所員山本勝市氏の批判。M 『代用の弾力性』の初荷がイギリスから到着。N 廣い讀者層をもつ二三の『高級』綜合雜誌の論文欄が毎號經濟學の論文で埋まつてゐるといつて、「文明批評家」が嘆息したのは當らない。さういふ事實がないのである。一部の經濟學者は景氣觀測とむすびついた説話によつて讀者界の外域に『讀者』を得てゐるけれども、今日の理論經濟學はむしろ『詩書家』のまへに曾ての魅力を失ひつゝあると見られる。

附記。今年度は雜誌論文の登載頁數を殘らず示した。一々雜誌に當つて見たのである。頁數の表示は利用者が論文の量をはよく知るに便であらう。入手叶はず當ることのできないものを目錄から排除した。各論文の内容に觸れるところが乏しかつたのは遺憾である。だが、今年度は若干の項目を設けて文獻の分類を企てた。そのために讀者を不便に陥れる懸念はなくとも、讀者をあやまることがないとはいへない。分類上の過誤・不適當などが讀者によつて發見されることを期待する。